

中日の政治文化・国際戦略に見る東亜共同体の 可能性・方向性（上）

夏 剛

1．政治・経済の長期波動の節目に於ける東亜共同体創設の始動の必然性と意義

小泉首相が2002年1月に提唱した「東亜細亜共同体」の創設は、2004年11月の東南亜細亜諸国連盟＋日・中・韓首脳会議で本格的始動の一步を踏み出し、1年後にマレーシアで東亜細亜サミットを開催する運びと成った。政治の多極化・経済のグローバル化の潮流の中で、東亜共同体の結成は期待される必然性を持つ。

近代以降の歩みを振り返って観れば、歴史的節目に立つ当該地域の現在位置が判る。

大激動・大分化・大改組の第1波として、1842、53年に中、日が相継いで英、米・露の砲艦に屈し開国を強いられ、1860、67年の洋務運動、明治維新で両国の近代化への道が拓かれた。

第2波として、1894年の日清戦争で日中の力関係が逆転し、10年後の日露戦争で日本の東亜覇者の地位が一層固まった。

第3波として、日本は「大東亜共栄圏」の名で占拠範囲を東北亜から東南亜まで拡げた後、1945年の敗戦で全て吐き戻した。其中で台湾と朝鮮は再び民族分断に陥り、朝鮮半島は1950～53年に南北、米中激突の戦場と化した。

第4波として、1997年に香港の中国返還の直後にタイの通貨危機が東亜に波及し、日本の「第二の敗戦」を加速させた。中国は1999年のマカオ回収で亜細亜の最後の植民地に終止符を付け、「世界の工場」と責任有る大国の役割を發揮し始めた。2000、02年の韓朝、日朝首脳会談で和解の気運が高まった朝鮮半島も、中国の仲介で米・露を交えた北京6者会談で緊張緩和へ向いつつある。

東亜共同体の胎動は当該地域の約50年周期に合うだけでなく、世界史でも政治・経済の分水嶺に位置する。2000年の日・米発IT企業群株式バブル崩壊と翌年の9・11襲撃は、情報技術

革命の万能神話や米国の一極支配の破綻を意味した。2003年春の米英聯軍のイラク攻略と世界株式相場の底打ち、翌年の小ブッシュ大統領再選後の米ドル軟調と国際素材商品高・欧州通貨高・人民元引き上げ帰趨は、世紀の交の世界的通貨緊縮が通貨膨脹へと転換して行く中で主役の交代を予感させる。

新千年紀を挟んだ数年はコンドラチェフ長波の谷に当り、約55年周期の景気循環の前回の底¹⁾ 1942-45年は、恰度米国が戦争の危機を繁栄の機会に転化させた時期である。長波の頂点だった1973年の石油危機・ニクソン衝撃及び越南戦争敗北を経て、米国は世界最盛の優位を保ちつつも衰退の兆を見せ始めた。伝説的米国投資家・バフェットは2002年に半世紀以上維持して来た方針を変更し、始めて米ドル以外の欧州通貨や豪ドル等を基金に組み入れ、翌年に史上2番目の海外投資先として中国石油天然気の大株主と成った。1969年ソロスと共に量子基金(Quantum Fund)を創設したロジャースは、「中国の世紀」や実物投資への強気と米国経済への悲観を唱え共鳴を博した²⁾。

朝鮮戦争の特需で戦後復興の契機を手にした日本は半世紀後、中国「爆食」³⁾の特需で泡沫経済崩壊後の低迷打開の活路を掴んだ。中国は香港回収と共に英国から19世紀前半の「世界の工場」の株を奪い、旧英国植民地の印度は今「世界の事務所」として米国人の仕事を奪っている⁴⁾。欧米を雇用増無き景気回復の落とし穴に陥らせた別の要因である情報技術産業でも、異名・“IC”の印・中は軟・硬両面の牽引車を成している。19、20世紀の英、米の単独制覇も21世紀には再演されず、世界の繁栄の重心は欧米以外の地域や新興勢力に移って行きそうだ。

政府中枢に近い米国大手投資銀行(証券会社)のゴールドマン・サックスは、2003年10月にBRICs^{ブリックス}待望論を打ち出し、目下米国の4分の1に過ぎぬブラジル・露・印・中の域内総生産(GDP)は2039年までに米・日・独・英・仏・伊の総和を上回ると預言した。先進国首脳会議(G7)で露、中が招待されるに至ったのも、豊富な人的・物的資源や強い成長力を持つ新星の台頭に伴う勢力図の変化だ。半年後ブラジルが早速BRICs+南アの「対抗首脳会議」^{サミット}の開催を提案したのも、地球規模の政治・経済の地殻変動の一環であるが、東亜首脳会議創設の合意が予想よりも早く出来た事は、米・欧への敵愾心と地縁の親和力の結果と言えよう。

2004年5月1日、中東欧10ヶ国の加盟で欧州連盟は25ヶ国に拡大し、4.5億の人口、8兆米ドルの域内総生産を以て、米国(2.8億人、10兆米ドル)に比肩する存在感を改めて印象付けた。米国独り勝ちの湾岸戦争後の1993年に発足したEUの実力は、'99年に発行した欧州通貨が忽ち第2の基軸通貨と成った事にも窺える。“ASEAN+3”は人口20億、GDP7兆米ドルを擁す第3大勢力に成るが、EUの亜細亜版を目指す東亜共同体の基盤 東南亜諸国連盟は、奇しくも其の前身なる欧州共同体(EC)の創立の翌月(1967年8月)に結成された。

東亜首脳会議の創設は比律賓首相が認めた通り、米国・欧州連盟に対抗する意図が大きい⁵⁾。初回議長国にマレーシアが選ばれた事は、1990年末に同国首相が「亜細亜経済協議体」を提唱

し米国に潰された経緯を考えれば、冷戦後唯一の超大国の神通力の低下の表徴とも取れる。「亜細亜経済協議体」や「東亜共同体」の推進にマレーシアと中国が最も意欲を示しているのも、亜細亜金融危機の中で独自の防波堤で域外の攻撃を^{かわ}躲した両国の姿勢を思い起すと興味深い。「全球化」の名を借りた政治・経済・文化の覇権主義と一線を劃す其の立場は、東亜共同体の安全保障・経済協力・文化融合の方向を示すが、米国の懸念も根拠無き恐怖ではない。

「昇龍」日本 「4小龍」韓国・台湾・香港・新嘉坡 「4小虎」インドネシア・泰・マレーシア・比律賓 「巨龍」中国の雁行型発展を経て、東亜は戦後世界の一大成長セクターと成った。世界第二の経済大国や核兵器保有の国連安保理常任理事国だけを観ても、此の地域の総合的实力は判る。更に東北亜の範囲を地理学的に北亜の露西亞極東・^{シベリア}西比利亞まで含めれば、東南亜に隣する南亜の印度と合わせてBRICsの大半が連結部に跨り、政治・経済・軍事上の重みが益々増して来る。東亜の目覚しい飛躍の陰の奇跡には、第三世界で例外的に実現した地域連合も有る。亜細安（ASEAN）が1999年に東南亜全域を覆うに至った成功は、東亜共同体の青写真に現実味を持たせている。

然し、2002年^{しか}亜細安首脳会議では東亜共同体創立の^{めど}自途は2020年とされ、此の設定は広域統合の困難と当該地域の複雑を如実に物語っている。東北亜の中でも数々の隘路（bottle-neck。中国語＝「瓶頸」）が存在しており、朝鮮半島や台湾海峡兩岸の民族分断も解決の見通しが立たないし、日本と中・韓・朝の歴史的怨念も根深く、其は皮肉にも東亜共同体を唱えた小泉首相の靖国神社参拝で再燃した。1997年^{アセアン}亜細安首脳会議で日中韓が非公式に招待されたのは、金融危機の荒波を乗り越える為に大船に乗ろうとの目論見も有ったろうが、東亜内部の南北は接近と共に摩擦も増幅した。東南亜諸国の域内総生産は韓国に相当する程度なので、「10 + 3」が「3 + 10」に取って代られて行く状況の中で主導権を巡る暗闘は免れない。

東亜首脳会議の創設にインドネシアが難色を示したのは、現実と歴史の両方に理由が有る。此の国は曾て中国と亜細亜の反新植民地主義の枢軸として結ばれたが、1965年の政変で突如反中国の方向へ走った。ジャカルタを中心に4「小虎」・1「小龍」が結成した^{アセアン}亜細安は、当初は中・越の脅威を意識し反共の色彩が強かった。今や米国の誇大も有って東北亜の地政学的^{リスク}危険が世界の注目を浴びたが、朝鮮停戦後の東亜の全面戦争は越南が戦場であった。中国は1979年元旦に米国と国交を結び金門への砲撃も同時に止めたが、直後に越南への懲罰的討伐を仕掛けた。東北亜は人類史上唯一核爆撃の被害を受けた地域だが、核兵器の保有や開発で非核区の東南亜に地域覇権の懸念を与えたとしても^う領けなくはない。

只、注目すべき現象として、朝鮮停戦後の東北亜では全面的軍事衝突は無かった。朝鮮の青瓦台大統領府強襲（1968年）、朴正熙暗殺（'74年、夫人死亡）、ラングーン殉難者廟爆破（'83年、韓国副首相等19人爆殺）に対して、韓国は武力報復に訴えず水面下で対話を図り和解に繋がった。中国は1958年に金門を砲撃し米・蔣連盟に楔を打ち込んだが、双方の応酬は忽ち

実害を与えぬ相互隔日施行の儀式に化した。李登輝の「総統」再選を阻止する為の軍事演習でも、台湾海峡へ発射されたミサイルは実弾を搭載せず、其の最中に江沢民政権初期以来の兩岸密使会談が続いたと言う⁶。戦術核兵器に由る外科手術的打撃の淵に差し掛かった中ソ国境衝突も、越南主席・胡志明^{ホー・チミン}の葬儀に参列したソ連首相・ゴスイキンが北京に寄り協議した事で落ち着いた。1969年9月11日の其の出来事は32年後の“9・11”事変と対照的に、当該地域の危機回避の能力・可能性の高さが窺われた。

一連の動きに東南亜が脇で登場したのは、東亜の南北の不即不離を現わしている。東南亜と東北亜の境界線を隔てた中・越に焦点を絞ると、近くて遠い両地域の分・合の変易が見えて来る。中国は大国の矜持から域外での恐怖活動を潔しとしないが、20世紀の例外的越境暗殺は蒋介石の刺客が仏領^{ハノイ}の河内で漢奸・汪精衛を襲った事(1939年)だ。中共政権は軍事顧問や軍隊の派遣も含めて越南の抗仏・抗米戦争を援助したが、米軍と死闘を繰り上げながらも参戦を伏せ続けた。朝鮮戦争では米国への宣戦を避けるべく原案の「支援軍」を変えて「志願軍」の名で出兵したが、越南戦場で使った非公式名称の「後勤(兵站)部隊」は一段と晦渋であった⁷。越南と反目した後1991年に和解を迎えたが、'99年大晦日に合意し翌年に調印した陸上国境条約では中国は出血奉仕^{サービス}を提供し、'79年に軍が死守し国民的英雄伝説を遺した係争地の老山・法卡山を譲った⁸。

小利を捨てて大益を得、小異を存して大同を求めるとは、周辺国に対する中国の半世紀以来の基本姿勢である。2000年ノーベル平和賞が金大中大統領に授けられたのは、南北首脳会談を実現させた「太陽政策」への顕彰だが、1973年に東京で韓国大使館の諜報員に本国へ拉致された彼の生還・活躍も、東北亜の一体性と共に私怨を超えて米・日へ接近した毛沢東と通底する。中国は'92年の鄧小平南巡で「和平崛起」(平和的台頭)の幕を開け、同年の中韓国交樹立は「不以意識形態劃線」(觀念形態^{イデオロギー}を以て線引きせぬ)の外交新思考の手本と成った。其は当然ながら金日成の無言の抵抗に遭った⁹が、金正日の「実利社会主義」は鄧・江の内政・外交の「实惠」(実益)志向¹⁰と一緒だ。

2. 東亜共同体成立の障碍と動力：羨望と抵抗が織り合う「情結」(complex)

38度線の両側、台湾海峡の兩岸の一卵性双生児めく同根性は、東亜の各方面の間でも様々な形で見られる。「度尽劫波兄弟在，相逢一笑泯恩讐。」(劫波^{ごうは}を度り尽くして兄弟在り，相逢うて一笑すれば恩讐^{ぼろ}を混ぶ。)満州事変の翌々年(1933年)魯迅が日本の友人に贈った此の句¹¹)は、中日や国共の和解に対する礼讃か祈願に好く引き合いに出される。1982年に全国人民代表大会副常務委員長・廖承志が蒋経国宛での公開書簡で統一の希望を此に託し、1993年に新嘉坡で開いた初の兩岸会談で台湾の海峡基金会理事長・辜振甫も此を引いた。然し、70年経っても

親善・融合は実現に程遠いので、世の中は綺麗事で行くわけが無い。中国近代文学の第一声と成った魯迅の小説『狂人日記』（1918年）は、兄や村人に食われて了うの^{しま}ではと言う主人公の被害妄想が主眼だ。日本でも有る「血は水より濃い」の観念は、自民党派閥の「嫉妬集団」の様相を觀ても、同類相愛と同族嫌悪の表裏一体に気付かせる。

日本の「第4権力」・報道機関の頂点に立っている渡邊恒雄（読売新聞社長）は、長年の政界觀察に基いて斯く述べた。「日本の戦後史の流れを見た時、イデオロギーや外交戦略といった政策は、必ずしも絶対的物ではなく、人間の権力闘争の中での、憎悪、嫉妬、そしてコンプレックスといった物の方が、大きく作用して来た」¹²⁾。中国で共鳴を博した元米大統領・ニクソンの指導者論でも、人間の生臭い感情や赤裸々な欲望が政治・外交の原動力として説かれた¹³⁾。蔣経国は日本軍に爆死された生母の墓に「以血洗血」の誓いを刻んだが、^{えと}干支一巡後の自民党総裁選で小淵恵三に負けた梶山静六も、其の表面上紳士の競合の内実を「血で血を洗う戦い」と喝破した。握手して仲直りするよりも敵手を冷遇する方が正直だと言う彼の逆説¹⁴⁾は、非情の世界の条理を如実に表わした。当選後の小淵が對抗馬の梶山・穴馬の小泉と手を結んで記念撮影を撮った光景は、今回ラオスで小泉首相を真ん中に中国総理・韓国大統領と3人で手を重ねて握った構図、水面下張り合う^{アセアン}亜細安+3首脳会議の協力体制と三重写しに成る。

心の中の痾を指すcomplexの中国語訳の「情結」は、錢其琛元外相が言う「非洲（アフリカ）情結」¹⁵⁾の様に、友情の絆を表わす転義も有るが、此の概念はcomplexの劣等感の含みも絡んで、常に「羨憎相織」（羨望と憎悪が織り合う）¹⁶⁾の性質を帯びる。スハルト政変と連動したインドネシアの華僑排斥は、3分1世紀後の亜細安経済危機の頃に再び爆発し、1978年の越南の華僑排斥も中国に堪忍袋の緒を切らせた。当時新嘉坡を訪問した^{ファン・バンドン}范文同首相は李光耀に華僑差別の理由を説明する際に、華人の貴方が分る様に彼等は何時でも中国に心を寄せるのであり、我々越南人が何処に居ても越南に心を寄せるのと一緒だと率直に言った¹⁷⁾。其の「非我種族、其心必異」（我が種族でなければ、其の心は必ず異なる）の心理¹⁸⁾と現実とは、孫文にも影響を及ぼした昔の日本の「亜細安一家」の理想を嘲笑うが、文・種の近い漢字文化圏の日・中・韓の提携が東南亜に遅れる事は、「伙伴」（パートナー）の羈絆の「人（糸）+半」の字形に隠れた摩擦・反発が一因だ。

同じ戦車に縛り付く軍事同盟こそ究極の運命共同体であるが、其の固い紐帯で結ばれた中ソ友好同盟も10年余りで有名無実化して30年後に自然解消したし、中朝の類似関係も「面和心不和」（表は和合を保つが心は和合せぬ）で形骸化している。中国が朝鮮、越南戦争の際に出兵を辞さなかった理由は、「唇亡齒寒」（唇が亡びれば齒は寒し）の共存・自衛なのである。米ドルと^{ベッグ}peg（止め釘）の固定連動で一蓮托生と成った中国と香港も、「唇齒相依」（唇と齒は頼り合う。唇齒輔車）故に亜細安通貨危機で共闘したわけだ。但し、唇と齒は表と裏、軟と硬の差に困り、対等の「相互依靠」（^もちつ^もたれつ）には成り難く、隣接の為「同室操戈」（身内

[仲間] 同士が矛を向け合う。内輪揉め) が起き易い。

東亜共同体の「風雨同舟」(風雨の中で同じ舟に乗る。苦難を共にする), 「同舟共済」(同じ舟に乗る者が助け合う) は結局、各々の国益の為の呉越同舟の節が多い。三国時代の魏軍が安定・連繫の為に停泊の船隊を鎖で繋げ、呉・蜀聯軍に焼かれて全滅した赤壁会戦 (208 年) の教訓は、一心同体・一蓮托生の共倒れ・連鎖破綻の危険を示した。1998年に世界的金融危機を触発した米国ヘッジ・ファンドLTCMは、ノーベル経済学賞に輝いた2人の米国教授の参画にも関わらず、^{ヘッジ} hedge (損失・危険を回避する両掛け) の根本に違反して火傷を負った。此の語彙の「垣根; 障壁; 防止策」の多義、及び敷地や野、畑の仕切りにも使う英国の用法から来た「囲んで守る」意¹⁹⁾、^{ヘッジ・ファンド} hedge fundの中国語訳の「対衝基金」(対衝 = 双方向の相反行動、相殺) は、此の文脈に於いても示唆に富む。

東亜共同体は米国の「排他的」の警戒の通り対外的障壁を築く節も有るが、「長城」の内側にも「一国二制度」めく「双軌」(複線) が当然敷かれよう。国民党時代の山西軍閥・閻錫山は独立王国を守る為に、省内の鉄道の幅を敢えて全国基準より広くして置いた。自ら要職を務めた中央政府の侵攻を阻む其の防壁は、奇しくも越南の広軌と同じ規格であり後に中国が援越に活用した²⁰⁾。対越配慮から中国は明初に設置した辺境要所・鎮南関を「睦南関」、「友誼関」に改名した (1953, 65 年) が、列車が車輪を調整しないと相手国に入れ^{はい}ない仕組みは断層の表徴だ。小泉首相は「共に歩み、共に進む共同体」を謳ったが、言わば「同根不同心、同道不同志」(同根でも同心に非ず、同道でも同志に非ず) の実態も予想される。

「臥榻之側、豈容他人鼾睡」(臥榻の側、豈他人の鼾睡を容れんや)、と宋太祖は江南の使者に一喝したが、周辺地域の異端を断固許さない意志は、朝・越との国境への米国の肉迫を必死に阻止した中国にも貫かれた。其に比べれば同床異夢は排他性が薄く進歩とも言えるが、門戸開放は中国の世界貿易機構 (WTO) 加盟 (2000 年) の様に機会と危険が同時に付く。「ビッグ・バン」(宇宙創成時の大爆発) と呼ばれた英国の金融・証券制度の大改革 (1986 年) は、^{ビッグ・バン} 倫敦金融街の「ウインブルドン化」(参加者の多国籍化) を招き、其を真似た日本の金融開国 ('98 年) も弱肉強食の再編を引き起した。経済財政・金融担当大臣の竹中平蔵は2002年に韓国を銀行再編の模範に挙げたが、韓国でも'98年金融危機に因る半国有化の結果、5大銀行が相当程度で外資の手に落ちた²¹⁾。司馬遼太郎等の「藩は一個の企業体」の譬え²²⁾は国家にも適用するが、地域統合への躊躇は吸収合併を恐れる下位企業の心理と似通う。毛沢東は「老大哥」(兄貴) ・ソ連への訪問でスターリンの冷遇を喰らい、金日成も或る国際首脳会議で椅子が用意されなかった屈辱を味わったと言う²³⁾が、大国と小国の論理・感覚の差も「兄弟」の歩み寄りを拒む。

中・朝は「鮮血凝成的戦闘友誼」(鮮血で固まった戦闘の友誼) を呪文の様に誇示して止まぬが、金日成は朝鮮停戦後忽ち中国の勧告を顧みず親中派を肅清した²⁴⁾。越南は「同志 + 兄弟」

と呼び合う中国の絶大な人的・物的援助を得つつ、1960年代初めから教科書や軍の伝統教育で東漢の馬援將軍（紀元前14 - 49年）の侵攻（41年）を取り上げて中国を貶し、後に鄧小平の激憤と「懲罰」を誘発する遠因と成った²⁵。鄧はマレーシア訪問（1978年）で共産軍掃蕩を顕彰する国家英雄記念碑への献花を断り、外交的打算を優先した范文同^{ファン・バンドン}の献花を「魂を売る共産党の敗類（成らず者）」とした²⁶が、内外の色々な場合で昔の中国侵越に遺憾を表した周恩来²⁷は、訪越の際に馬援の鎮圧で殺害された原住民女傑の記念碑に献花した²⁸。西独首相・ブランドが波蘭でユダヤ人勇者碑の前で土下座した挙動（'70年）に等しい自省は、周恩来外交の美談や中共の国際主義の証とされたが、'55年に胡志明^{ホーチミン}主席に対して先人の越南侵略を詫びた²⁹毛沢東は、馬援の「青山处处埋忠骨，何須馬革裹尸還」（青山处处忠骨を埋め、何ぞ馬革で尸^{しかばね}を裹^{つつ}んで還^{もち}る須いむ）を、同じ60年代初めに海外への革命輸出の精神教育に使った。アフリカ某国反体制勢力の軍事顧問としての赴任を拒んだ將軍を此を以て糾弾した周恩来は、同じ名句で1964年ラオスに軍事顧問として赴く別の將軍を激励した³⁰。

中越国境の円満解決は主に陸上に限り領海に関する諒解は不完全で、南沙諸島の領有権を巡って最近紛糾が再燃し始めたが、中日の「政冷経熱」や東亜提携の総論賛成・各論分岐も両面を見せている。目下台湾の「去（脱）大陸化」風潮に異論を挟む台湾作家・龍応台は、政治は一時的であり文化は永遠であると言い、中国文化は漢族以外の蒙古・満清等の勢力を含んだ多元的存在だとした³¹。其の「大河の支流や渦」の比喻で言えば、東亜と他地域、東南亜と東北亜、両地域の内部、政治と経済、現実と理想……等の対立軸は、同方向・異速度か逆方向の渦を巻きつつ相対・接近し合う。東亜共同体も一心同体の良縁が結ばれず、不同心の両円の複合或いは双焦点の楕円に成る公算が高いが、求心力と遠心力の均衡を考える前に連結を導く親和力を探ろう。

東亜共同体は地縁関係、政治力学と構想経緯から観て、数種の双円から成る連環の様相を呈す物である。其の範囲の東南亜+東北亜、中核の亜細安^{アセアン}創設構成員+日中韓に於いて、幾つかの「後来者居上」（後に来る者が上位に居る）が見て取れる。東アジア共同体協議会（2004年発足）会長を務める等、共同体創設に熱心な中曽根康弘元首相は、日中関係の拗れ^{こじ}を理由に、「東北亜中心国家」を自任する韓国の盧武鉉大統領に牽引役を要請した³²が、中国でも一部有る「“帯頭羊”（引率羊）は韓国」の待望³³と共に、政治・軍事大国の中国と経済・文化大国の日本の対峙を思わせる。此の双壁は今や拮抗の均衡点に立っているが、「10」に対する「3」の「反客為主」（主客顛倒）は日中の間でも起きよう。現に、中国は既に「客氣」（遠慮）を捨てて北京6者会談の主宰役を買って出たし、政府の「走出去」（打って出る）の進軍号令で企業が積極的に世界へ進出し、海外の有力企業を買収する等々の攻勢を掛けている。

中国は亜細亜金融危機の中で人民元引き下げの自粛を以て、1987年10月米国株式大暴落の際の日本の大蔵省主導の買い支え以上に貢献した³⁴。日清戦争後の中日の勝敗、優劣は二転三転

したが、今や相剋共生の緊張・依存に在りながら、再び「後來者居上」の徴候が鮮明と成った。2004年に日本で嫌中論調が沸騰した契機は、年頭の小泉首相の靖国神社参拝が惹起した隣人の憤慨への反発だが、前年に中国が2超大国に次いで「有人宇宙飛行倶楽部」に入った事を考えても、周回遅れの相手に追い付かれた時の動揺も見え隠れする³⁵⁾。同年の月中、中韓、韓日の間に領土・帰属を巡る論争・紛糾の激化も、保ち合いが煮詰まり振幅が大きくなって行く³⁶⁾ シグナル 信号である。

司馬遼太郎は日比谷公園焼き討ち事件(1905年)を日本の軍国化の起点と視た³⁷⁾が、首都戒厳を惹起した^{ちようど} 恰度百年前の其の出来事は、中国現代史の幕開けの5.4運動('19年)と対で眺めれば興味津津である。日露戦争を制した後に米国の圧力で対露賠償金・樺太北半分割拠を放棄した譲歩は、大衆の怨嗟を買い「臥薪嘗胆」の悲願を湧かせたが、親日高官邸の焼き討ちで爆発した5.4運動の怒気の起因も屈辱の領地割譲だ。目下両国官民の達成感・欠損感が混じ合った摩擦は、此の世紀の連環に於いて既視感がある。両事件の其々26年後に日本が満州事変を惹起し、中国が抗日戦争に勝った展開も、歴史転換点の伏線的作用の現れとして留意したい。

東亜共同体創設の目途とされた2020年は、日本の「第二の敗戦」の起点から恰度四半世紀後に当る。中国は中共成立百周年や人口頂点^{ピーク}に因り持続高成長の目標を其処に設定したが、約30年前の日本の道を進んで来た経験則からすれば、其の頃には昭和末期並みに栄華を極めるに至ろう。東南亜諸国連盟、欧州共同体が生まれた1967年に、明治維新百周年を迎えた日本は強盛復興の決意を新たにし、東京五輪から25年に亘る黄金時代を築いた。中共建党的1921年は世界のコンドラチェフ波の山であったが、頭数が英・仏・伊^{いづ}の何れよりも多い此の集団が率いる国家は、新世紀の景気循環の最初の頂上に立っても不思議ではない。

東亜の雁行型成長も日本の「頭雁」(引率雁)役も終り、此の広域は「群龍無首」(龍[人]の群れに頭^{かしら}が無い)の戦国時代に突入した。先進国も途上国も情報技術革命の時代では同じ出発地点に立つ、と米国未来学者・トフラーは『第三の波』(1980年)で主張したが、其の「第三の波」の理想論と違う現実的判断として、錯綜した利害で連衡合従を図る各方面は自他の力関係を意識せざるを得ない。「東北亜民族主義」、「東亜共同体」と言う2つの妖怪の同時出没は、中国の「後來者居上」を警戒しつつも東亜全体の「後來者居上」を狙う心理に因る。「雁群」の後発者も日本の「経済侵略」に反発しながら、羨望や嫉妬を起爆剤に自身の変革・強化を実現させたが、東亜共栄の道でも同じ逆説的追い風は吹くだろう。

1989-91年の冷戦終結、東欧革命、インターネット登場と湾岸戦争、ソ連解体は、21世紀の世界史の基調を定めた。其の伏線の中・英の経済改革とソ連のアフガン侵攻が起きた'79年、米国発の“Japan as No. 1”論が台頭した。昨今の中国囑望論は其の主語が“China”に変わった物だが、“is”ならぬ“as”の選好は深意があった。日本は遂に一番手に成り損ない、中国

も同じ期待外れを演じるかも知れないが、牽引役としての可能性は否めない。ヴォーゲル教授は其の著書に「米国への教訓」の副題を付けたが、『不滅の大国・米国』（1990年）の後の『米国への警告 21世紀国際政治のパワーゲーム』（2002年）でも似た問題意識を見せたナイ教授は、国力の質の変化に着眼し1990年に「軟実力」(soft power)を提唱した。政治・軍事の実力が万能でなくなった時代では、徳目や魅力が国家の影響力の源泉に成ると言う³⁸⁾が、東亜共同体は東亜的価値観・美意識の発信でも其の意義を持ち、中・日は其々の得意分野の政治と経済で特に貢献し得る。

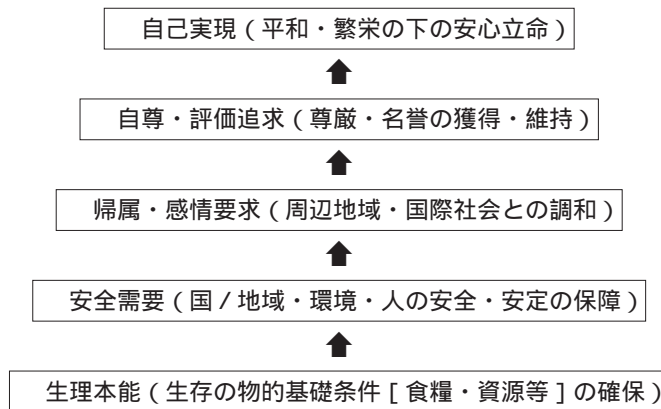
3. 地縁経済学に見る漸進的共同体形成の必然性：欲求階層・雁行型成長に於ける格差

華人作家・陳舜臣は日本国籍取得の翌々年の1992年、「親龍」日本と「4小龍」の成長に就いて、「儒教圏繁栄論」は必ずしも唯一の鍵言葉^{キーワード}ではないと述べた。「4小龍」の共通点は異文化受容の緊張を強いられた殖民地経験に在る、と言う李登輝の見解に同調して、彼は「複合文化経験圏繁栄論」を唱えた。曰く、日本語学習を強制された台湾の二重言語使用者^{バイリンガル}(bilingual)は、負担も重いものの複眼が持て選択肢も増えた³⁹⁾。其の当否はともかく、英国殖民地時代から否応無しに公用語と成った英語は、香港・新嘉坡・印度の近代化・全球化で確かに強味を發揮して来た。儒教と複合文化は文化制度の接点で結ばれるが、複数の殖民地時代と異文化を体験させられた「4小虎」の急成長も合点が行く。一方、半占領か半植民地しか経験の無い日、中の場合には、儒教の性質でもある複合文化に負う処が多い事に成ろう。

戦争中に『司馬遷』を著した作家・武田泰淳は1948年、両国の全滅の体験の多寡を比較し、敗戦まで「処女」だった日本に対して、中国は度重なる姦淫・離縁に因り複雑で成熟した情欲が育まれた女体の様だ、と語った⁴⁰⁾。彼と『毛沢東 その詩と人生』（1965年）を共著した中国学の泰斗・竹内実は、其の半世紀後に中国の成長の原動力を経済の欲望に求めた⁴¹⁾。「昇竜」と「巨龍」の繁栄は両者の卓見を手掛りに考えれば、喪失の廢墟から栄光を復興させる動機も要因に思えて来る。其の挺子^{てこ}は毛沢東・李登輝が信奉した『易経』の「窮 變 通」の原理⁴²⁾や、教育・企業管理に示唆を与えたマズローの欲求階層説に隠されている。

彼の米国の心理学者が1943年に提起した此の論理は、人間の欲望を金字塔構造^{ピラミッド}の5層に分けた。其の 生理本能、安全需要、帰属・感情要求、自尊・評価追求、自己実現は、低次が満たされて始めて高次へ進む事に成っている。国家・地域に当て嵌めても思い当たる処が多いが、戦後の日本や「文革」後の中国に関して言えば、絶頂から絶境への転落の落差が反発・上昇の意欲との正比例に先ず気付く。経済準超大国に昇り詰め再び亜細亜最強の地位に返り咲きした後の日本は、自己完結の境地に入った故に頭打ちと成ったわけだが、東亜地域統合の文脈に入れて見ると、発展の段差は共同体形成の障壁と成り得る。

図1 マズロー「欲求階層説」に対応する国/地域の5段階上昇志向(括弧内は筆者の敷衍)



中国は社会主義の初級段階に在り、「温飽」(衣食の保障)の解決が急務だと鄧小平は規定したが、マズロー原理では正に初級段階の課題である。毛、鄧時代の末期の戦備優先や「暴乱平定」は、同じ初級段階の安全渴求の強迫観念に駆られた過剰反応と言える。毛の「無法無天」は経済崩壊と国際孤立を招いたが、「無頼国家」と誹そしられた今の朝鮮も食糧と防衛の確保が精一杯で、世界の一員として帰属・感情や評価を求める余裕は未だ無い。他方の台湾は経済面で亜細亜の先進地域と成ったが、「認同」(アイデンティティ)・外交の基本を存在の確保・認知とした李登輝の主張⁴³⁾の通り、国際社会の孤児として第2, 3層に跨る側面も有る。蒋介石政権は1955年に香港で周恩来搭乗予定の英国民航機に時限爆弾を仕掛け、中共外交官・記者等多数死亡の惨劇を造ったが、越境暗殺を自制した大陸時代の大国の矜持を捨てたわけだ。蔣経国時代の諜報機関が米国で作家・江南を暗殺した事(1984年)と共に、朝鮮が海外で敢行した数々の恐怖活動を彷彿とさせる。江南事件が台湾民主化への転換点と成ったのは米国の圧力の他に、安全保障の危機の或る程度の緩和も背景に有ろう。金正日が日朝首脳会談で拉致を認め謝った挙動は、「以退為進」(撤退[讓歩]を前進と為す)の奇手の様に映ったが、国際社会の譴責の重荷と安全面の「自己資本」増殖の兼ね合いの結果と思える。

存在は意識を決定し、意識は存在に影響を及ぼす、とマルクス主義は考えたが、毛が1958年に英・米を猛追する「大躍進」を始めた動因は、「球籍」(地球籍。国際社会に於ける存在資格)が剥奪されかねない危機感だ。其の盲動の頓挫の恰度30年後に「球籍」論争が起き、先進国入りを目指す改革加速の声に応える形で、鄧は賃金・物価体系の大改革に踏み切った。朝鮮は2002年に同じ賭けに出て同じ超通貨膨脹に見舞われたが、追走の動因も落伍・失格を恐れる焦燥に他ならない。日本との約30年前後の発展格差を縮める為の中国の躍動と重なるが、亜細亜の雁行型成長は順次に欲求構造の高層へと進む過程の様にも映る。経済学者・赤松要教

授の雁行型成長構想の第一声 論文「亜細亜新興工業国の産業発展」は、奇しくも交戦中の米国で生まれた「欲求階層説」と同じ1943年の所産だが、俱にコンドラチエフ長波の谷で蓄積した反転の契機として、「窮すれば変ず」の原理に通底する。

人口増加頂点が到来する2020年頃まで高成長を続ける中国の国家戦略は、経済学者・胡鞍鋼を首班とする研究集団の報告『生存と発展』（1989年）に依る処が多いが、題の2語は正にマズロー説の第1, 2層の欠乏欲求と第3 - 5層の成長欲求に対応する。「温飽」問題が解決され「小康」（一応の余裕）の実現が途に着いた変化は、新世紀の中国の足場と力点が生存から発展に上がった事を意味する。但し、第3層に腰を据えつつ第4層へと頭角を出す中で、全体の底上げにも関わらず内部の発展段差は寧ろ拡大した。胡鞍鋼は2001年に所得水準で中国の省・自治区・直轄市を「4つの世界」に分けた⁴⁴⁾が、其の富裕、先進、中進、後進の4等級は欲求階層の金字塔構造と重ねれば興味深い。

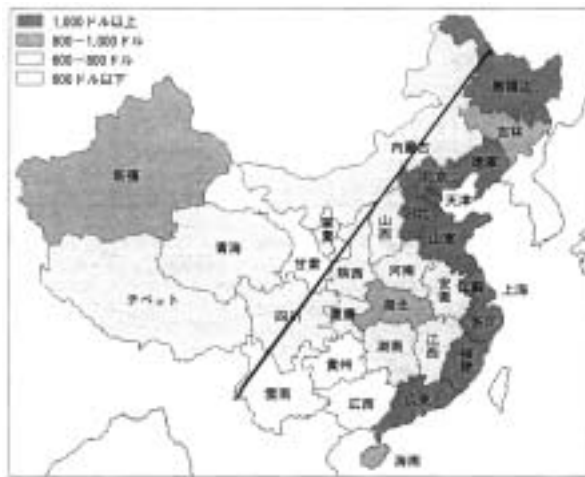
胡鞍鋼は1988年の国内地域（省・自治区・直轄市）間経済格差の最大7 - 8倍を、旧ユーゴスラビア解体前並みの危険水準とし是正を説いた。後に最上位と最下位の格差は逆に10倍を突破した⁴⁵⁾が、其の理想と実情は相反する原理を思わせた。即ち、一方では、過度な経済格差は民族問題等と絡めば統合の溝に成りかねないが、他方では、1つの連邦・2つの文字・3つの宗教・4つの言語・5つの民族・6つの共和国を擁し、7つの隣国と辺境を接したチト一大統領時代のユーゴ（1953 - 80年）や、其の再編・廃合時（'92 - 93年）以上の経済格差を抱えた今の中国の様に、強固な政治統治は其を超克し得る粘着力が有る。東・西独の統一や中・東欧諸国のEU加盟も現わした通り、経済的段差は意志と時間さえ有れば統合の障碍を構成するまい。

東・西部時間を設けた米国や11もの地方時間が有るソノ露と違って、中国は国民党時代から全国統一時間で地域の中央への帰属を強いて来た。「車同軌、書同文、行同倫」（車は軌幅を同一にし、書は文字を同一にし、行動は倫理を同一にする）と言う、秦始皇の中国統一の手法の延長に思えるが、中国・朝鮮・韓国と日本新幹線の国際標準軌と露西亞（除くサハリン州）・^{モンゴル}蒙古や越南の広軌、日本在来線・露サハリン州の狭軌の幅違いを觀ても、東北亜や東亜の広域統合の制度的・技術的困難を感じずにはいられない⁴⁶⁾。更に、行政的統轄が出来ても同一化が不可能な領分には、自然条件や経済、文化が有る。中国が近来進めている大西部開発と東北振興は、多民族の大所帯の構造的断層の不易と平準化の難度を思わせる。

人口地理学者・胡煥庸の1933年の発見では、黒龍江省瑗輝（今の黒河。凡そ北緯50度、東経127.5度）と雲南省騰衝（同25, 98度）を結ぶ約45度の直線の東・南と西・北は、其々国土の半々を占めるが、人口比率の約94%対6%が百年変らなかつた。建国後の西部支援の移民政策にも関わらず、今日も黒河 - 騰衝線の両側の軽重は昔の儘である⁴⁷⁾。東北 - 西南に延伸し長城と一部だぶる降雨量15^{インチ}吋等高線⁴⁸⁾も此にほぼ吻合するが、東北の北端まで含む大西

部は正に此の2本の風土・環境区分線の西・北側だ。国防上でも重要な意味を持つ降雨量15^{インチ}等高線は、住み好い湿潤地帯と住み難い乾燥地帯の境界と成り、遊牧に適した後者の発展の限界や先天的条件の改造の悠長を浮き彫りにする。

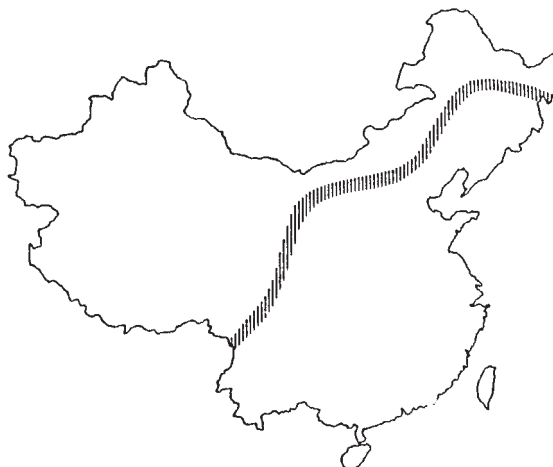
図2 黒河 - 騰衝線と中国各省・市・自治区（除く台湾）の2001年1人当りGDP水準



(環日本海経済研究所『北東アジア経済白書2003』[註46参照]43頁「全国31省・市・自治区の1人当りGDP(2001年)」図[中国国家統計局『中国統計年鑑2002』拠り作成]を用いて、本稿筆者が黒河 - 騰衝線を添加した物)

図3 中国降雨量15^{インチ}等高線の概念図

十五英寸等雨线示意图



出所 = 黄仁宇『中国大歴史』中国語版(註48参照)26頁

国の主な「硬實力」（ハード・パワー）は人口・領土規模や経済力、軍勢力等だが、人口と領土の比重の極端な乖離に見る西域の経済的軟弱や、「第4世界」が総人口の半分も占める中国の現状を觀れば、国勢を量る多様の物差しが再認識できよう。「東亜共同体」構想が世に出た2002年頭時点の1人当り国内総生産⁴⁹⁾では、予定構成員の中で最多の人口と最大の国土を誇る中国は、最高の日本の40分の1に過ぎない（927米ドル対37,408米ドル）。東南亜に於いて人・地・経済規模とも断然1位のインドネシアも、域内最高の新嘉坡の30分の1弱（同678対20,701米ドル）で、他の3「小虎」よりも相当劣っているので、量的規模と質的水準の両方に対する把握・吟味が必要だ。

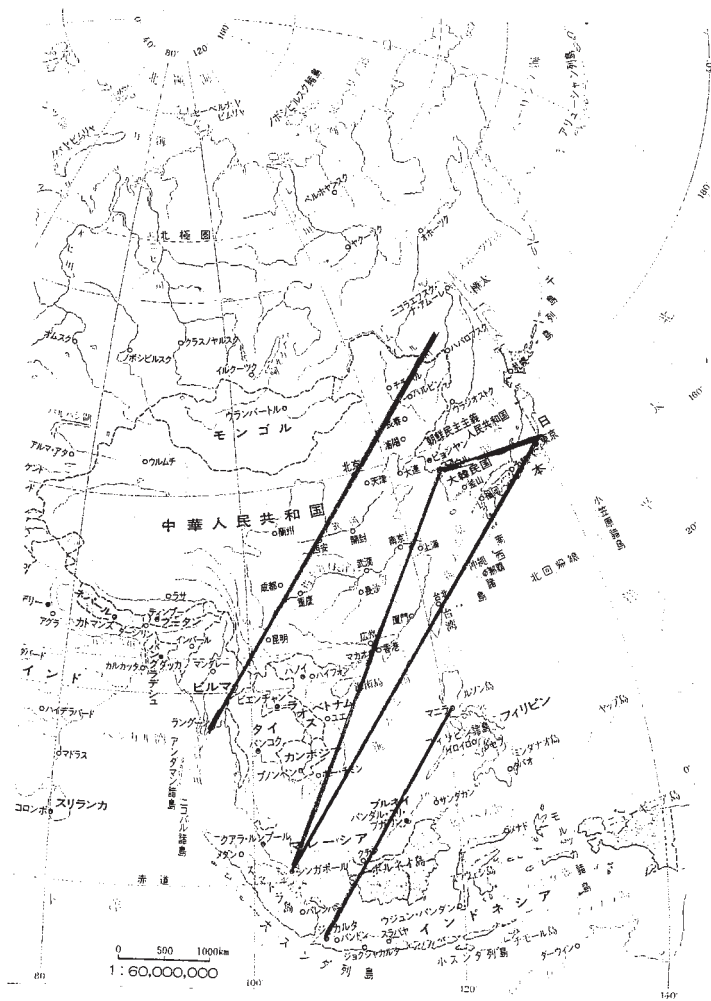
李光耀は新嘉坡の初代首相に就任した翌年（1960年）のインドネシア訪問で、スカルノ大統領領から彼我の人口や自動車の数を訊かれ多寡を比較された。150万人対1億人、全国1万台対首都5万台と言う差を前にして、面積に関しては貴国は東南亜随一ですと李は相槌を打った⁵⁰⁾。彼を困惑させた其の然り^{さげな}気無いは言うまでもなく實力誇示の意図に由り、1072年に渡宋した成尋も皇帝から日本の首都の面積・人口と全国総人口を先ず訊かれた⁵¹⁾。彼の天台宗僧侶が咄嗟に「不知幾億万」と虚勢を張ったのは恐らく、隋煬帝の逆鱗に触れた聖徳太子の国書（607年）の「日出づる処の天子、日没する処の天子に致す。恙無きや」と同じく、大国に侮られるまい對抗意識の発露であつたらう。亜細亜最盛の隋は其の煬帝の激怒の11年後に内乱で消滅し、宋も成尋渡来の半世紀後（1126年）金に都・開封を占領され朝廷が南遁したが、東南亜の「小龍」の「一番小虎」に対する逆転勝ちは、千年前の東北亜史の片鱗に既視感めく予感が有った。

新嘉坡の1人当りGDPは1959年の400米ドルから、31年後の李光耀退任時に30.5倍（12,200米ドル）と成り、1999年には2万2千米ドルに達した⁵²⁾。インドネシアの牛歩との対照は其の10年前（1949 - 79 / 89年）の日本対中国と重なるが、東亜の2つの奇跡は工業社会の加速度性と共に競合相手の敵失も味方だった。東南・東北亜の最大国の「泥足の巨人」化はソ連解体と通じて経済軽視が敗因であり、李光耀との20分間の会見で専制統治の論理を喋り捲ったスハルト⁵³⁾と、ニクソンとの会談議題を「吹哲学」（哲学談義）と限定した毛沢東は、俱に国家的意味では「経済動物」の対極に在る政治家なのだ⁵⁴⁾。日本の此の渾名^{あだな}は奇しくもスカルノ政権臨終の1965年、此の両国が中心を成す亜細亜・アフリカ新興勢力の論壇で、パキスタン外相・ブットが「羨憎相織情結」を以て付けた物である。彼は12年後スカルノと同じく軍事政変で大統領の座を失い、国際社会の同情も空しく翌々年に絞首刑に処されたが、其の頃から日本に脅威と嫉妬を抱いた南亜は結局、経済運営の拙さで亜細亜雁行型成長の末尾と成った。

其の時代のインドネシアと中国は経済の落伍と政治の蹉跎の相互因果、「達」に成らぬ「窮」の儘での「濟天下」の悲劇を見せた。東亜雁行型成長は「独行者最速」（独りで行く者は最も速い）の定理を証明し、「独善其身者先富」（独り我が身を善くする者は先に富裕に成る）の法

則にも思い付かせる。「雁群」の先発・先達組は恵まれた平和的環境を生かして経済に専念し、次発・次達組は専制統治で保障した安定の下で成長を推進し、後発組の飛躍も政治 経済の移行の成果に他ならない。取り残された不発組の朝鮮等も合わせて、実質的に既に終焉した東亜雁行型成長は理論上4つの列を呈している。更に人口分布地理区分の黒河 - 騰衝線に倣って国境に拘らぬ経済実力等高線を引けば、東亜の「3つの世界」を浮き彫りにする「雁行梯隊」斜線が思い当たる。

図4 東亜の経済成長度の「3つの世界」(「先富」・「次富」・「落後層」)の概念図



(本稿筆者が小学館『日本百科全書2001』の「アジアの各国」地図を用いて、文中詳述した「第1世界」, 「第2(2.5)世界」, 「第3世界」の区分線を引いた物)

東京 漢城 新嘉坡の3点を線で結ぶと、鋭角三角形の枠内には「昇龍」日本の南部と4「小龍」が恰度ほほ全部入り（台湾は台北を含む北部）、中国の江南・華南も加わって東亜の最富地域と成る。4「小虎」と「巨龍」中国の主体・中間層、更に広義的東亜の一部なる露極東の沿海地域を入れる区切りとして、ハバロフスク - ハルビン - 長春 - 北京 - 西安 - 成都 - 重慶 - 昆明 - ランゲーンを繋ぐ直線が思い浮かぶ。中国の大西部や北亜の西ベリリアの大半、東北亜のモンゴル蒙古は、正に「第2世界」圏外の「第3世界」に収まる形だ。亜細アの最後の加盟国で東南亜唯一の軍事独裁政権支配下のミャンマーは、二重性格を体現する様に首都以東の半分が「第2世界」に跨る。黒河 - 騰衝線とほほ重なる此の線は、漢城 南京・上海 広州・香港 新嘉坡の線とほほ平行する。中国最富の深圳と最貧の甘肅省礼県（北緯34度、東経105度附近）は、此の図で見事に其々「第1世界」と「第3世界」に位置し、日本の内の東北・北海道・沖縄も「第2世界」に区分される。「第1世界」の東側の境界線はハバロフスク - ランゲーン線ともマニラ - ジャガルタ線とも平行し、後者以東は「小虎」の中の中進部分として「第2.5世界」と名付けたい。

朝鮮やカンボジアの「第2世界」帰属は経済的実力では違和感も有るが、朝鮮の地縁政治学上の重みや両国の言わば地縁経済学上の波及受益の可能性には似合おう。美称・「金三角」の中・朝・露国境図門（豆満 トマン）江地域の東北亜経済協力開発区も、日本の環日本海地域と手を組む点でも「第2世界」の共同事業体と思える。東京 - 漢城の線で恰度「裏日本」が「首富」（首位・一等の富豪）圏から弾き出される事は、黒河 - 騰衝線と同じ「域勢」（「国勢」に因んだ造語）を浮き彫りにする。東北亜と東南亜の最富国・日本と新嘉坡が首尾を成す細長い楔形の「首富」区は、一極集中に成り勝ちな富の分布の不均衡を思わせるが、勝ち組が雪達磨式に出現する「亜細亜工業国雁行型成長形態」を絵に描いた観も有る。何れも地図上の東北 - 西南方向の約45度斜線は中国語の「騰衝」の意の通り、「龍・虎・雁」の右肩上りの「騰（飛翔）・衝（突撃）」の表徴に見える。既成と進行中の「東亜の奇跡」の氣勢・騰勢を形容する語彙として、「衝鋒」（突撃）や「衝刺」（最終追い込みの全力疾走）が申し分無い。「先富」区の両側の「次富」区が順次に追隨して行く雁行型成長の摂理を考えれば、胡錦涛政権が大西部の開発よりも重工業基地・東北の振興を先行したのは賢明な「梯形遞進」だ。「先富」の牽引で「雁群」後方の裾野へと波及して行く「共富」（共同富裕）の道は、中国に於いても東亜に於いても歴史的帰趨と言えよう。

4. 「先発 共栄」の道：「窮 変 通」の量子飛躍と「庶 富 教」の梯形遞進

此の図は世界に於ける東亜の軽重と関連して観れば、地球規模の「首富」区の変遷が興味を引く。亜細亜開発銀行の試算に拠れば、世界に占める亜細亜の経済規模は、工業社会に入った

1820年には6割も有ったが、1940年には人口比率の6割と著しく釣り合わぬ2割まで下がり、今は4割まで増え、2025年には再び6割に達する見通しだ⁵⁵⁾。工業社会と後工業社会^{ゴスト}に於ける世界経済の主役の交代を伴う浮沈は、歴史の風車の百年単位の長期変動周期を浮き彫りにする。1820年の経済大国上位5ヶ国の実質GDPの世界に占める比率は、中国の28.6%と印度の16%に続く仏、英、露は其々5%程度だったが、6位の日本(3.1%)と9位の米国(1.6%)は1992年に、其々3位(8.6%)、1位(20.3%)に成った。其でも日本の上昇率は一時の神話の割には突飛でもないし、中、印の2位、5位の維持とブラジルの躍進(露に次ぐ10位⁵⁶⁾)は注目すべきだ。前回の10傑から消えた^{オーストラリア} 太利、^{オーストラリア} 西班牙(7,8位)の当時の1.9%を上回るブラジルの2.3%は、21世紀のBRICs台頭の信号と観て能い。更に英国の衰微(8位、3.3%)の帰趨とも照らせば、毛沢東も留意した中国史の「300年歴代興亡周期率」⁵⁷⁾の世界的普遍性に気が付く。中国は^よ 亜細亜の昔の強盛と後の不振の最大な変動要因であったが、底力・反発力の相乗で相場格言通りの「谷深ければ山高し」の飛躍が期待できる。20世紀^よ 亜細亜の中興の立役者・日本の後退は、栄枯の循環と共に強盛の方程式まで示唆している。

ロジャースは極東を21世紀の有力な成長地域とし、成功の鍵は「日本の資金力+中国の労働力+^{シベリア} 西比利亜の資源」だと考えた⁵⁸⁾。中国流で言えば「財源+能量(パワー)+^よ 能源(エネルギー)」の結合だが、其の一昔(10年前)の彼の予想を超えて今や中国が^よ 西比利亜の資源を確保すべく^よ 露石油会社の買収に出た⁵⁹⁾。彼と彼以上に^よ 露西亜に乗り込んだソロスが創った^{クオンタム・ファンド} 「量子基金」と、「鉄女」の元英首相が顧問を務めた^{タイガー・ファンド} 「虎基金」(Tiger Fund)の名は、皮肉な巡り合わせで新富国の秘密を解く手掛りに成る。世界的情報技術企業株式泡沫崩壊の2000年、「虎基金」は解散に追い込まれ「量子基金」も同じ大損の故に保守的運用に切り替えた。^{ヘッジ・ファンド} 「対衝基金」の両雄の退場・萎縮と対照的な^よ 東亜「龍・虎」の躍進は、「百獣之王」・獅子に次ぐ「^よ 亜王」・虎の特質と量子の原理にも因る。真珠湾奇襲作戦の暗号名「虎!虎!虎!」が示す攻撃性の他に、当時の日本の安全確保の為の石油争奪と域外制覇の為の勢力拡張は虎の貪欲でもある。一方、隘路を一旦突破した後に加勢する量子飛躍に因んで、^よ 東亜の奇跡は「量子(次元・段差)飛躍型成長形態」とも呼べよう。

其の“bottle-neck”は瓶の狭い口が中身の出入りを窮屈にする事から、隘路・難関に転義した比喻であるが、封印が解かれて瓶から出た悪魔の暴れと言う西洋の寓話が連想される。毛沢東は自分の性格を「虎気+猴気」の複合と分析した⁶⁰⁾が、主たる虎の気質と副次的猿の気質は其々勇猛・非情・貪欲と躍動・^{あまのじやく} 機敏・天邪鬼だ。後者の祖形・「美猴王」孫悟空は「^{ひと} 育天大聖」(天に^{ひと} 育しい大聖)と自称した処に、虎・猿共通の挑戦精神が顕れているが、500年の幽閉から解放された後の猛威は正に檻を出た虎、隘路を破った量子の勢いだ。1979, 89, 99年を起点とした中国の3段飛びも其々、経済的貧困、政治的孤立、歴史的屈辱からの脱出が原動力である。『易経』の「窮 変 通」は量子の隘路通過の変易・経過と思えて来るが、瓶の内と外、^{ネック} 頸と本

体の落差は欲求不満の爆発を孕む。日本の学者が「奢侈」の字形の「大きな者、多い人」の寓意から捉えた中国の「物量主義」、及び中国的「欲望の自己増殖・大快楽主義⁶¹⁾」は、百年の孤独から千年の愉楽へと走る「虎・猴」複合体の精神力の源泉だ。

英国が工業社会の最初の覇主と成り日本が後工業社会の第二経済大国と成った事は、人口・幅員の規模が必ずしも経済成長に正比例しない事を物語っている。但し、其の19世紀前半の「世界の工場」と20世紀後半の「東亜の奇跡」の再演の観が有る中国の飛躍は、両者の強烈な物的欲望・上昇志向と人口・幅員の規模との相乗の「如虎添翼」（虎に翼。鬼に金棒）を思わせる。現に、中国は人口・幅員を安価な労働力や無言の国威と化し、経済・安保上の利益の獲得・増殖を進めている。Goldman Sachs（中国語訳名＝「高盛」^{ガオション}）発のBRICs台頭論は、曾て前共同会長が財務長官を務めた（ルーピン、1995 - 99年）米国政府の価値判断と通底し、人口・幅員の規模に対する重視は米・中共通の尺度を窺わせる。新興4強の中の中・印は古代4大文明の半分を占め、国土の大半が亜細亜に在る露は20世紀の社会帝国主義超大国だ。三者の栄光を取り戻す「孤憤」（孤独の故の発憤⁶²⁾）と巨大な国勢は、『紅樓夢』の4大名門の「百足之虫、死而不僵」（百本足の虫〔蜈蚣〕は死んでも倒れない）を想起させる。

李光耀はソ連解体を憐憫な眼で観ながらも、原子爆弾の所持や核・宇宙科学者、^{オリンピック}五輪優勝者の輩出を根拠に、此の民族を軽視しては成らないと断言した⁶³⁾。ソ連に反撥しつつも息子に露西亜語を習わせた事は毛沢東と同じである⁶⁴⁾が、今の「北極熊」は俗諺の「瘦死的駱駝比馬大」（駱駝は瘦せて死んでも馬より^{でか}大い）の通りだ。BRICs有望論が世に出る直前の英米聯軍のイラク攻略は、古代文明の一角が新千年の劈頭に再盛の道を絶たれた事にも成る。西亜細亜の其の国の凋落は独裁体制の自業自得と共に、「駱駝」程の総合的国力を不可逆に失って久しい所以でもある。往年の「悪の枢軸」の独・伊・日が大战後間も無く捲土重来を果したのは、政治・経済・文化の遺産の厚さに負う処も有ろう。ソ連の自滅に関わらず露西亜は政治・軍事大国の余威を猶持っており、中国の西域に似た西比利亜の資源の強味も加わって対日の心理的優位は余り変るまい。

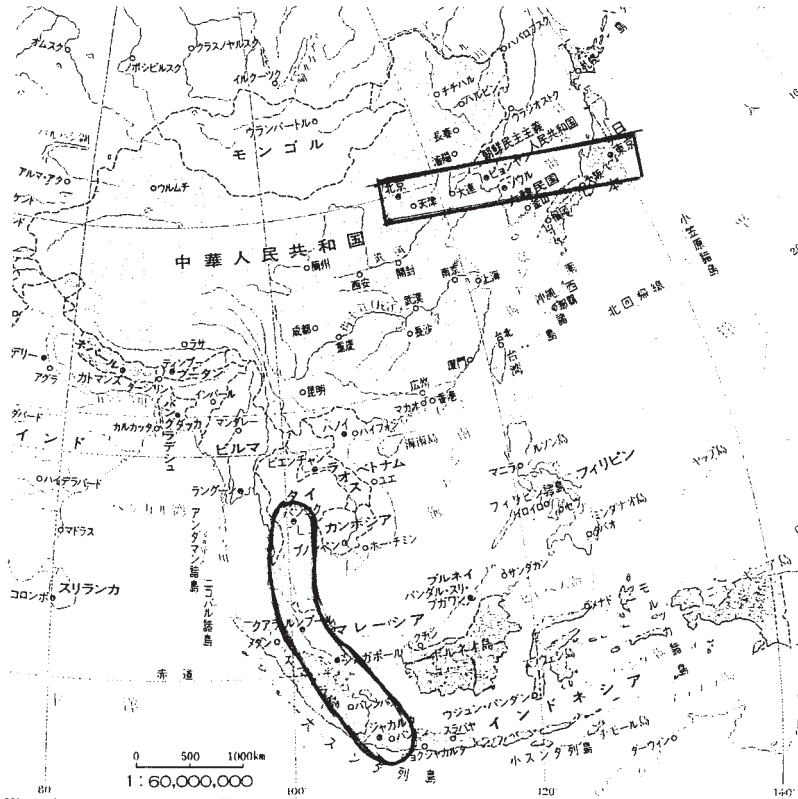
李光耀はソ連の瓦解を清王朝末期の数十年に比した⁶⁵⁾が、鴉片戦争（1840年）から8ヶ国聯軍北京侵攻（1900年）までの中国の連戦連敗は、確かに老大国の威風が地に塗れた全滅の様相が濃い。再び列強と比肩する国際的地位を獲得し日本との屈辱的優劣逆転を再逆転したのは、幅員・人口の利点に頼った抗日戦争の勝利の結果だ。現代開幕（1919年）前後の其の明暗の分れ目には、物理的国勢と精神的国勢（国家の意志・威勢）の相乗の有無・強弱も有ろう。空間・人間・観念と合わせて社会・歴史の4元素を成す時間も、中国の持久戦の味方と日本の速決戦の天敵に成った。自然的時間と相対論的時間、静的国勢と動的国勢の相違・相関を示す様に、両国は其々「文革」と泡沫経済崩壊に由る「失われた10年」で勢いが^{とど}止まり、其の間に競合相手^{ライバル}が加速度的躍進で「後來者居上」の氣運を得た。顕在的規模・実力に対する潜在的

帰趨・念力も時間変数と似た挺子だが、東亜の「龍騰虎躍」(龍が飛び立ち虎が躍り上がる。生気勃勃)も騰勢と統制が同時に要求される。

毛沢東が抗日戦争中に否定した「唯武器論」と同じ様に、経済も唯一決定的要素でない事は昨今の日本の政治的影響力の限界で立証された。鄧小平の経済専念路線の本質も政治・経済の両輪併進に在るが、宋帝も成尋への質問で然様な複眼を示した。神宗が訊ねた天皇・大臣の名、官制、行政区、地理、気候等の事情⁶⁶⁾は、国政・国勢の根幹を成す中枢構造と政治風土に他ならないが、「要用漢地は何物貨」(中国の何の物を用い[輸入し]たいか)の件は貿易の関心が表れた。成尋渡宋の恰度900年後に田中角栄の訪中で日中国交正常化が実現したが、其の前に周恩来は佐藤首相の後任人事に就いて熱心に情報を収集した⁶⁷⁾。国際戦略と国家建設に俱に目を配る中国支配者の遺伝子を受け継いで、毛沢東は国交正常化前の1957年に王震将軍が率いる農業代表団の訪日を批准し、陳雲は水稻栽培の経験を吸収するよう指示した⁶⁸⁾。改革・開放初期の鄧小平・陳雲両巨頭体制は、毛・周時代まで続いて伝統的「帝王+宰相」型権力頂点構造の変種だ。其の政治と経済、域外と域内の重点分担は、東亜共同体結成の文脈では中・日に当て嵌まる処も有る。

雁行型経済成長の梯隊を4層に分けた斜線と交差の経緯を織り成す様に、東亜の地政学的重心地域を結ぶ線として2本の軸が思い浮かぶ。東北亜では日・中・韓・朝の首都が一文字形で並ぶ北緯35 - 40度線の細くて狭い区間であり、同じ北緯40度線近辺の華盛頓・^{ワシントン}・^{ニューヨーク}・^{サンフランシスコ}・^{オリンピック}桑港との等高線も興味深い。東南亜の方は赤道を挟んだ細い弧状の地帯と成り、「小龍」新嘉坡と「小虎」の内のGDP総額上位3国(インドネシア、泰、マレーシア)の首都が集中する。其々東-西、南-北走行の対照と両者の距離は東亜共同体の規模と困難を改めて浮き彫りにするが、此の座標系を見詰め直して気が付く事は、先ず夏季五輪開催に見る言わば「亜細亜雁行型国際出世形態」だ。東京 漢城 北京の移行は其々24年、20年の間隔と共に、地理的にも見事にほぼ等距離の2都間で北緯36 - 38 - 40度近辺の西進・北上を呈する。東亜の政治的「首強」(首位・一等の強者)圏内と経済的「先富」圏外に在る北京の位置は、其の逆の上海と補完して総合的国力の「双拳」⁶⁹⁾を成す。「政治の北京+経済の上海」は東北亜の「政治の中国+経済の日本」⁷⁰⁾に対応するが、南の「首強+先富」の重疊地帯に首都を置く国が新嘉坡しか無い事は、東南亜の両輪と政治・経済力学上の弱味を示している。

図5 東亜の政治力学の南北2「強極」の概念図



(図4と同じ地図 [除く北亜の露西亜部分] を用いて、本稿筆者が東北亜・東南亜の政治的中枢地帯 [文中詳述] を表記した物)

小泉首相が新嘉坡で共同体構想を提起した事は、東亜の南・北の「首富」の組み合わせも意味深長である。新嘉坡は「小国寡民」の故に「4小龍」の中で存在感がやや薄く、日本は頭数も含めて億万長者の貫禄が有る。但し、日本は「富国倶楽部」・G7の創設構成員であり、経済力に応じて国連維持費の2割も負担して来ながら、安保理常任理事国・中国の低い分担率(2%)に反比例の発言権には敵わ^{かな}ない。中国が自負する総合的国力は政治・経済・軍事等の相乗なのだが、「兩彈一星」(核[原子・水素]爆彈、大陸彈道導彈、人工衛星)を配置した西域は、「半壁山河」(国土の半分)に相応しい補完で全体の「完璧」に寄与している。

「兩彈一星」を高い国際的地位の獲得の切り札とした鄧小平は、天安門事件後に訪中の泰首相・チャートチャーイ・チュンハワンとの会見で、「塊頭大、人口多」(恰幅[幅員]が大きく、人口が多い)故に容易に吞まれぬ事をも中国の強味に挙げた⁷¹)。更に彼が重視した数千万人の

「僑牌」(華僑カード⁷²⁾)も、資金・経験の両面で近代化の援軍と成っている。東・西域に跨る「中華民族大家庭」と海外まで分布する「大中華圏」は、其々地縁・血縁で繋がった「合衆国」や「連結企業体」の観が有る。「国際互聯網」(インターネット)に因んで東亜共同体を「地域互聯網」と言うなら、其の「天網」の有形・無形の赤い糸の可成り^{かな}の内実も、全体の力を強め外圧を撥ねる為の各方面の結集・補完の思惑だ。其の結合に対して米国が覚えた不安は、「中国脅威論」の拡大版と言えよう。

日本保有米国債を売却したい誘惑に駆られたと訪米の橋本首相が冗談っぽく吐露した途端に、米国株式市場で史上2番目の幅を記録する暴落が起きた。亜細亜通貨危機の10日前(1997.6.23)の此の笑劇的衝撃は、高値警戒感に因る米国の自立的調整を促した側面も有るが、平和志向に封じられた軍事力と同じ抜けぬ宝刀の底力と空虚は、日本の識者が泡沫経済破綻後の有り様を形容した「張り子の豚」⁷³⁾と似通う。中国は亜細亜通貨危機の中で同じ圧力を米国に掛けて、香港を攻撃した国際投機筋の退治で援軍を得たとされるが、実力及び行使の決意の兼備、政治・経済・軍事の能力・実力の相乗や相互転換・増殖こそが、米国が排他的東亜共同体に抱く恐れの原因である。第2次大戦後に米国の無敵神話を打破した2回の戦争とも、宿命の様に東亜の朝鮮と越南が舞台なのだ。

米国の天敵の中・朝・越は俱に「惨勝」の後に経済的苦境に陥り、其の逆相関関係も此の地域で軍事的解決が長らく回避された要因と思える。不名誉な撤退を強いられた米国の皮肉な収穫は、戦場の消耗で実力が削がれた相手と周辺国の発展格差が一体化の障壁と化した事だ。東亜共同体形成の最大な困難は日・中・韓の共同体意識の欠乏とされるが、政治的志向の相異と共に経済的落差も温度差の由来である。孟子の「窮則独善其身，達則兼濟天下」(窮すれば則ち独り我が身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす)の通り、中国は一応の余裕が出来た1997年から東亜地域協力を意欲が湧いた。インドネシア・スマトラ島沖大地震と印度洋大津波の後も、責任有る大国の印象を天下に宣揚すべく先進国の援助引き上げ合戦に加わった。東南亜・南亜の此の災厄は奇しくも毛沢東生誕111周年の日(2004.12.26)に降り掛かったが、別種の大国の矜持から印度が援助を拒否した意地張りは、毛死去直前の同規模(死者24万人)の唐山大地震(1976.7.28)の際の中国と一緒だ。一方、援助獲得の為に冒険も惜しまぬ朝鮮は今も欠乏欲求を満たす為に独善的の儘でいる。

但し、朝鮮の核開発の狙いは数十年前の中国と同じく、国防の盾で安全を保障し外交の切り札で利益を得る一石二鳥だろう。「先軍政治」は「文革」の軍事独裁を彷彿とさせるが、「強盛大国」の目標も中国と一緒にである。援助を引き出す為の威力や度胸の顯示は、欲求階層の上方の帰属希求や自尊追求の動機も帯びる。マズローの通進説に符合する発展三部曲として、先ず人口を増やし次に富まし最後に教化すると孔子が言った⁷⁴⁾。毛、鄧、江3世代は正に此の3段階を順次に踏まえたが、他の途上国も何れ「先富」(先に富裕に成る)組の道を辿り、飢渴精

神で勝ち取った「^{ハード・パワー}硬実力」を自己実現の「^{ソフト・パワー}軟実力」に昇華させよう。

東亜共同体の構想は曾て「数十年先の事」と冷やかに見られた⁷⁵⁾が、急に動意が付いたのは数十年先の見通しが出来た事も有ろう。今の域内の最富国と最貧国の1人当りGDPの差は200倍近くにも^{のほ}上り、上・下双方の乖離度は平均水準を無意味にする程大きい^{てこ}が、途上国は高い速度と長い期間を梃子に格差を縮めて行こう。赤松要が提起し其の高弟が敷衍した「亜細亜工業国雁行型成長」は戦後、日本の牽引で業界を超えて国家・地域の次元で実現したが、日本の官民一体の「護送船団方式」疾走も「1942年体制」発足の半世紀後に疲弊した。日本は競争力が低下し緩慢な衰退に入り爛熟へ向かい、韓国も1人当りGDP 1万米ドル達成（1995年）後は此の水準の近辺を徘徊し続け、中国も日・韓に続いて2030年頃には人口が減少に転じる見込みなので、東亜は平準化の収斂や飽和後の調整を経て今世紀中葉の大再編を迎えるだろう。

5. 超越的・形而上的連帯の紐枢：地縁政治・経済・文化的等高線と精神風土の通底

赤松要は戦争中に将官待遇で新嘉坡に4年間滞在し調査・研究を進めた⁷⁶⁾が、其の頃に生まれた日本首相が約60年後に其の地で「東亜共同体」を提唱したのは、亜細亜雁行型成長の達成と新展開^{しるし}の徴と言える。赤松構想が業界を超えて国・地域の次元に移行し始めた1956年⁷⁷⁾は、日本では経済白書『日本経済の成長と近代化』の宣言通り、「もはや戦後ではない」時代の始まりであった。「もはや戦争は無い」と言う金大中の訪朝帰来の第一声も、振り返って観れば朝鮮停戦後の東北亜に適用したのである。「亜細亜雁行型成長」説が最初に想起された'35年は中国に於いて、毛沢東が長征中に党・軍の大権を掌握し、後に国歌と成る抗日戦歌『義勇軍行進曲』が世に出た年だ。'55年の自民党結成と翌年の中・朝建国後の初党大会・新体制発足で、前回の東亜地政学的変動長波は新しい一巡に入ったが、今次長波の始動では'56年型集団指導へ回帰する中共に対して、自民党は'55年体制の金属疲労^{せい}の所為で'93年に遂に下野させられた。

人間学的長波の連続・止揚の両面を示現するかの如く、代って政権を握った新党党首・細川護熙は巡り巡って、盧溝橋事変の直前から真珠湾攻撃の直前まで3度首相を務め、A級戦犯容疑に指定され出頭直前に自決した近衛文麿の孫（母方）だ。日中全面戦争勃発直後の1938年1月に生まれた彼と等高線で繋がる様に、「第二の敗戦」後の最初の3首相　橋本龍太郎、小淵恵三、森喜朗も、奇しくも盧溝橋事変（1937.7.7）を挟んだ7月29日、6月25日、7月14日の生まれだ。歴史認識を巡る日中の対立が小淵内閣の頃から表面化した事は、時代の烙印や歴史の循環を感じさせる。此の偶然の一致と共に世代交替を思わせる等高線として、小泉純一郎、金正日、胡錦濤、温家宝は同じ1942年生まれである。太平洋戦争勃発1ヵ月後生まれた小泉は硝煙の記憶が無い最後の戦中世代の先陣と言え、干支一巡後の日朝首脳の握手は其だけ

象徴的意味を持つ。還暦で党・政首班と成った胡・温の誕生は鴉片戦争敗戦百周年にも当るが、普遍的「窮 変 通」の啓示が読み取れる。

胡・温は「文革」中に西域の甘肅で長年雌伏したが、1人当りGDPが全国2番目低い此の省は新世紀の「双駕馬車」(二頭馬車)の揺り籠と成った。党・国・軍3権掌握に由る「胡锦涛元年」の暁、カンボジア(同指標=195米ドル[同上,2001年])に次ぐ東亜第2の最貧国・ラオス(同324米ドル)で東亜首脳会議の設立が決定されたが、両者を考え併せれば示唆に富む。胡が1992年に鄧小平から2段飛び特進で党中央政治局常務委員に大抜擢されたのは、ラオスに近い最貧地域の貴州省(同344米ドル)、殺人的高原気候と厄介な民族問題を抱えたチベット自治区の首長を務めた(1985-88,88-92年)実績が大きい。非凡な気配りと忍耐力の持ち主・周恩来もチベットだけは遂に行かなかったので、「吃得苦中苦,方為人上人」(苦中の苦を喫し得て,方に人の上の人と為る)と言う、江戸時代の日本にも「常言」として入った格言⁷⁸⁾が立証された。

マレーシアが東亜共同体の前身を提唱し、初回東亜首脳会議の主催国に選ばれた事も、類いの座標系に置いて観れば必然性を感じる。同国の1人当りGDPは「4小虎」の中で断然1番(3,745米ドル)で、泰,比,インドネシア(1,873,934,678米ドル)の総和をも上回るが、東南亜と東亜の「首富」・新嘉坡と日本の其々18%,10%に過ぎない。東亜の経済規模・水準は亜細亜では群を抜くものの、米・西欧に比べて全体的には未だ中進と先進の間に在る。東亜共同体に於けるマレーシアや中国の位置は、世界に於ける東南亜,東北亜,東亜共同体の縮図とも映るが、20世紀後半の中・日の指導者も中・低所得地域の出身が多い。1885年以来の歴代日本首相で山口県の出身が一番多い(56中7人⁷⁹⁾)事も象徴的であり、明治時代の長州藩(山口)・薩摩藩(鹿児島)出身者の突出(其々4,3人)は、同じ西南の四川と隣の湖南・湖北の指導者の輩出と似通う。

訪中の田中角栄は談判が危機に瀕した時、意気消沈した大平正芳外相(後に首相)に対して、「君等大学出はこういう修羅場,土壇場に成ると駄目だな」と喝を入れた。2人は貧乏の身で其々新潟,香川から上京し活路を開いた初心に戻り元気を付けた⁸⁰⁾が、昭和・平成を跨いだ「新領袖」・竹下登の故里・島根県の人口過疎地域比率,GDP総額が何れも全国2番目に悪く、戦後保守政治本流の「校長」⁸¹⁾・吉田茂の出身地・高知の同指標が其々全国最悪と3番目に悪い事⁸²⁾,小淵恵三の祖父・父親が何度も生計・事業に危機に瀕した事⁸³⁾と共に、『易経』に基づいた毛沢東の「窮則思変」(窮乏すれば変革を思う)に頷かせる。ニクソンは貧しい家庭の出自を毛・フルシチョフとの共通項に挙げた⁸⁴⁾が、革命・暴力に満ちた20世紀に相応しく、中共建国後の3世代指導部の最中枢群の出身地は、所得水準の高い東部が少なく、中・下層の中・西部に集中した。

江沢民政権は「大西部開発」戦略の基礎として、地理・経済水準に依って東・中・西3部の

区切りをした。3大区は1人当り域内総生産でほぼ上，中，下の部類に当て嵌まるが，建国後の主要な指導者は西部の四川・重慶を除いて，中部8省の内の黒龍江・吉林を除く6省の出身者が突出して多い。江 胡時代の交の「四つの世界」の実態を浮き彫りにし，小泉「東亜共同体」提言時の東亜と較べる意図から，当事者の生・育の時期とのずれを承知の上で2001年度の数値を用いるが，当該地域の1人当りGDPの全国順位を並べ，全国平均値（927米ドル）との偏差を弾き出せば，次の通りに成る。

表1 中部6省・西部2省の中共建国後歴代要人の輩出と2001年1人当りGDP水準

区分・地域	順位	人均GDP	全国平均比	建国以降中共要人の主な出身者
中部・湖北	13 / 31	941米ドル	+ 3.6%	林彪・董必武・李先念・將軍多数
中部・湖南	17 / 31	730米ドル	- 19.7%	毛沢東・劉少奇・元帥3人・胡耀邦・朱鎔基
中部・河南	18 / 31	714米ドル	- 21.4%	趙紫陽・鄧穎超・李德生
西部・重慶	20 / 31	681米ドル	- 25%	李鵬
中部・山西	21 / 31	656米ドル	- 27.8%	華国鋒・彭真・徐向前・薄一波
西部・四川	24 / 31	633米ドル	- 30.4%	鄧小平・朱徳等元帥4人・楊尚昆
中部・安徽	25 / 31	629米ドル	- 30.8%	姚依林・胡錦濤（本籍）・吳邦国
中部・江西	26 / 31	628米ドル	- 30.8%	曾慶紅・汪東興・將軍多数

（本稿筆者が独自に考案・換算・作成した物。1人当りGDP数値は『中国統計年鑑2002』に基づき，1米ドル=8.3人民元の為替レートで算出した。全人代では各省・自治区・直轄市の地理的位置と経済発展の水準に応じて，東部12省区，中部9省区，西部10省区に分けた〔国家統計局，2000年〕が，筆者は大西部開発戦略の通念〔註44文献14，133頁参照〕に沿って，東部の広西と中部の内モンゴを西部に分類した。表1，2の「中共要人」の範囲は，主に政治局常務委員・国家主席・全人代常務委員長・元帥。）

湖南以下の各地が全国平均より2 - 3割も低い水準は，安徽の陳独秀が初代党首（1921 - 27年）を務めた中共の「窮 変」因子を裏付けた。中部地域で順位・偏差値が俱に最高の黒龍江（全国10位，+23.9%）からは指導者が出ず，毛沢東が林彪事件後に後継者として囑望した王洪文の故郷は全国平均に最も近い吉林（同14位，+1.3%）だ。更に富と乱の逆相関関係を思わせる様に，当局が「邪教」と断罪した法輪功の教祖・李洪志も「政治流氓」（政治的成らず者）・王と同じ吉林出身だ。黒龍江・吉林と同じ全国平均線上組の湖北の水準は比律賓並みで，保守派大物が多く出た山西⁸⁵はインドネシア以下であるが，中国全体の金字塔型構造を東亜首脳会議参加国と見比べれば，深圳経済特区と甘肅省礼県との171倍もの1人当りGDP格差⁸⁶は，最富の日本と最貧のカンボジアとの192倍に近似する。

中日政治文化比較の文脈に置いて観れば、初代の伊藤博文を始め首相輩出の山口・鹿児島と湖南の妙な等高線に気付く。同じ年の両県のGDP総額は47地方自治体中の24, 26位である⁸⁷⁾が、尺度の相違で厳密な対比とは成らないものの、湖南の上記指標の31地域中の17位は換算すれば正に両者の中間だ。首相出身者数歴代2位の岩手県(東京都と並列, 4人)の同28位は、此の変則的参照座標系に於ける相対的位置が河南に近い。同年の県民1人当り所得⁸⁸⁾では山口は絶対値と同じ全国24位だが、岩手と鹿児島との38, 44位は一層「窮変」原理の不易を感じさせる。岩手生まれの歌人・石川啄木(1886 - 1912)の貧困脱出願望、及び「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたわむる」の「縮み」志向⁸⁹⁾を思い浮かべると興味津々だ。

戦後首相が最も多く出た地方自治体は群馬(3人)であり、其の福田, 中曽根, 小淵は俱に重要な時期(1976 - 78, 83 - 87, 98 - 2001年)に国を司った。首都圏に近く1人当り県民所得が全国平均より僅か下回る14位⁹⁰⁾の此の県は、最近の中共指導部に出身者が増えた山東・河北⁹¹⁾の地理的位置や経済水準順位に近いが、春秋・戦国時代の魯・燕や『水滸伝』の舞台だった両地の殺伐な雰囲気^{こんにやくいも}が乏しい。群馬の特産物は全国生産高の9割弱も占める蒟蒻芋である⁹²⁾が、司馬遼太郎は蒟蒻を「日本の奇妙な食品の一つ」としてこんな風に吟味した。「成分のほとんどが水で、禅問答のような食品である。何の栄養もなく、それ自体が持つ味もない。(中略)栄養学的には咀嚼・嚥下の無駄というものだが、その無駄に味を付けて喜ぶあたりに、日本人の暮らしの底の何事かと結びつくものがあるかと思える⁹³⁾。」中曽根が後輩首相の小淵に冠した「真空」の異名も、其の群馬産の日本の特色を帯びている。

毛沢東時代の党・軍の頂点は其と対照的に、国、共政権の都(南京, 北京)から遠く激辛を好む湖南・湖北・四川の人が多かった。風水思想で運勢・傑物の源泉と成る「龍穴・龍脈」の少数集中の傾向を証す様に、毛と国防相・彭徳懐は湖南省湘潭県と同郷で、国家主席・劉少奇の故郷・寧郷とは50^キ程しか離れていない⁹⁴⁾。後の2人は「両雄不俱立」(両雄は並立せず)、「天無二日, 民無二主」(天は2つの日は無く, 民は2人の主は無い)の掟⁹⁵⁾で肅清されたが、正・反両面の「情結^{コンプレックス}」は諸刃の剣の如く地縁文化的危険を窺させた。聖徳太子の「憲法十七条」(604年)にも孟子所縁の「国に二君無く, 民に両主無し」(第12条)と有るが、激戦区の旧群馬3区も言わば「三雄不両立」の事情で不俱戴天の衝突が起き易く、政敵に対する小淵首相の仁義無き排除も宿命的と言える⁹⁶⁾。毛が自称した「無法無天⁹⁷⁾」は湖南の「多強」と楚人の激越にも由来したが、胡耀邦の失脚は同じ湖南省瀏陽県出身の古参指導者・王震も押す要因だったらしい⁹⁸⁾が、東北亜の日・中・韓の三つ巴も似た強豪の競合に成ろう。

毛が好きな佛語の「赤条条, 来去無牽掛」(裸一貫, 此の世に来るのも去るのも係累無し)⁹⁹⁾は、大韓航空機爆破事件(1987年)の容疑者・金賢妃の手記に出た朝鮮の諺「空手来, 空手去」(何も持たずに生まれて, 何も持たずに去る¹⁰⁰⁾)と通じる。「金持ちは喧嘩せ

ず」とは逆の「窮且愈堅」（窮して猶志を堅くする¹⁰¹⁾）の心理は、日本帝国の乾坤一擲や「ならずもの無頼国家」の冒険、毛沢東の「継続革命」と民主化闘士の急進示威等に現れた。中国の最後の対外・対内の武力行使は俱に四川人の鄧小平が決断し、天安門事件の際に国を牛耳った「8老」も半数が四川（鄧小平）・湖南（王震・宋任窮）・湖北（李先念）の人だ（他は山西2人〔彭真・薄一波〕、河南〔鄧穎超〕・上海〔陳雲〕各1人で、8分の7が中・西部出身）。其の「赤三角」は動乱・闘争の終焉を映して、第3世代指導部の中核では1992年体制（第14回党大会）の各1人から、'97年体制の2人（四川〔重慶〕の李鵬と湖南の朱鎔基）と成り、今や遂に皆無と成った¹⁰²⁾。

中央軍事委員会副主席・劉華清の退出で政治局常務委員が全て非軍人になった事は、建軍70周年の'97年の「文民統治元年」の性格を物語っている。建党50周年の1971年に毛沢東が「副統帥」・林彪の野心家集団を撃破する為に、赤軍時代の『三大紀律，八項注意』を自ら歌い党・軍幹部に服従を促したが、歌詞の共編者の1人が林彪と同じ湖北人の劉華清である。1916年生まれ彼の引退は建党前世代の退場をも意味するが、初回党大会に出席した董必武及び同じ湖北出身の李先念は国家主席と成った。劉の故郷・大悟に僅か約50[㊦]離れた黄安（建国後「紅安」に改名）の1県だけで、約200人もの中共軍将軍が出たから、辛亥革命の地でもある湖北は武装革命の「火薬味」（硝煙の匂い）が格段と濃い。権力の頂点から「九頭鳥」（9つの頭を持つ鳥。激情・喧騒を形容する湖北人の渾名）が消えたのは、其故に鹿兒島人の首相が昭和に出番を失った事と重なる。最後の薩摩出身の首相・山本権兵衛は大正13年（1924年）1月7日に退陣したが、恰度65年後の同日の昭和終焉を思えば隔世の断絶が感じられる。

一方、非連続的連続めく止揚・継承を示す様に、湖北人より数倍も「九頭鳥」的性格の強いとされた九江人が居る江西から、胡錦濤時代の政治局常務委員の9人中2人（曾慶紅・吳官正）も出た。中央委員会全198人中の江西人は彼等も含めて僅か3人なので、頂点に占める比重は驚異的であるが、赤軍の発祥地や曾の父親・曾山（内務相経験者）の血脈ゆかりの所縁を考えると頷ける。'97年選出の政治局常務委員7人中の3人が江蘇省内直径50[㊦]程の隣接地域で育ち（江沢民＝揚州，李嵐清＝鎮江，胡錦濤＝泰州），'81年以来の政治局常務委に共産主義青年団中央出身の「三胡」（胡耀邦，胡啓立，胡錦濤）が常駐して来¹⁰³⁾，胡耀邦時代の院政政治を司った「8老」の4分の1が彼と同じ瀏陽出身で、更に瀏陽同郷の楊勇が周恩来の「三楊」指名で楊得志（湖南人），楊成武（福建人）に次いで志願軍の主将として朝鮮に出征した事と共に，地縁・「人縁」（人的ネットワーク関係網）に因る密集や連続として中国政治の機微を示唆する。毛・彭の故郷を支点とする湘潭－寧郷－瀏陽の逆三角形の上辺のほぼ中点に在る長沙から，陳雲と共に計画経済を指導する第1世代の李富春が先ず出て，更に毛が好んだ明太祖・朱元璋の後裔と言われる朱鎔基が世紀の交の総理と成った。「第4世界」の辺地から指導者が余り出ず，抗戦中の党中央所在地の「革命の揺り籠」 陝西の出身者・高崗，胡啓立も政治的に夭折した事と併せ

観れば、歴史伝統や文化風土の生産性を感じずにはいられない。

「兵家必争之地」(戦争で双方が必ず争奪する要地)の徐州(江蘇北部)の近辺に、劉邦(沛県)と項羽(宿遷)が生まれ育った事は、「英雄造時勢、時勢造英雄」(英雄が時勢を造り、時勢が英雄を造る)の相互因果を思わせる。江沢民の故郷・揚州も周恩来の生地と同じ江蘇北部に在り、長江上流の西南・華中から下流の東南への権力重心の移転¹⁰⁴⁾は、中国版図の見立ての「鶏」の脂が載った腹に軸足を移す事である。揚州の傍の泰州で育った胡錦濤は上海生まれで、同じ沿海国際都市・天津の温家宝との組み合わせは、黒河 - 騰衝線の弦を背にした弓幹の如く、中原の河南人・趙紫陽も同調した黄河文明 海洋文明の展開¹⁰⁵⁾を象徴する。上海、天津の1人当りGDPは全国1位、3位だが、2人の揺り籠は新指導部の高学歴と共に中国の高成長・国際化の潮流に似合う。「海洋国家」志向の日本や越・比との領海紛争が表面化し、再び「好戦的雄鶏」¹⁰⁶⁾の印象を周辺に抱かせたのも、亜地域内の亜文明の衝突として必然性が有る。鄧小平は1992年に胡錦濤・朱鎔基の重用と共に政治局常務委員会の一席を劉華清に与えたが、「副帥」(中央軍委筆頭副主席)でも国防相でもない彼が唯1人の「軍代表」と成ったのは、元海軍司令(1982 - 88年)と原潜建造推進派の旗手である事を考えても国際戦略の布石と思える。

6. グローバル時代でも不易の中国流統治・外交の要諦：「^リ理・^リ礼・^リ力・^リ利」の重層・結合

指導者の揺り籠の中部内陸から東部沿海への分布推移は、富裕化の帰趨と全球化の時流に合致するが、全体的に底上げした中国は「発展途上大国」の自己規定の通り、世界では依然として中・下層に止まっている。2002年に選出された新中央委員会の構成員の出身地では、上位の江蘇・山東・浙江は全体の約3分の1も占めた¹⁰⁷⁾。東海・黄海に面した此の3省の上記1人当りGDPは、其々全国6位、9位、4位と高い。同じ'01年域内総生産絶対値の恰度2、3、4位の位置も、地縁経済 - 人文学¹⁰⁸⁾的説明を見事に成すが、絶対値1位で1人当り水準5位の広東と合わせ観れば、巨龍の氣勢や正体は一段と掴め得る。

表2 東部11省・直轄市の1人当たりGDP（同表1）と建国以降中共要人の主な出身者

地域	順位	人均GDP	全国平均比	建国後要人の主な出身者（とは前，今期政治局常委）
上海	1位	4504米ドル	+ 395.6%	陳雲・胡錦濤（生地）・錢其琛
北京	2位	3408米ドル	+ 235.4%	（中共の北京占拠年数の関係で指導部には無し）
天津	3位	2408米ドル	+ 164%	李瑞環・温家宝
浙江	4位	1753米ドル	+ 92.9%	周恩来（本籍）・喬石・尉行健・黄菊等多数
広東	5位	1640米ドル	+ 80.5%	葉劍英
江蘇	6位	1557米ドル	+ 71.4%	周恩来（生地）・江沢民・李嵐清
福建	7位	1491米ドル	+ 64.1%	陳伯達
遼寧	8位	1454米ドル	+ 60%	（歴代政治局常委には皆無し）
山東	9位	1261米ドル	+ 38.7%	康生・張春橋・万里・宋平・羅幹・將軍多数
河北	11位	1004米ドル	+ 10.5%	賈慶林
海南	15位	857米ドル	- 5.7%	（無し。直近の中央委員会でも皆無し）

GDPの絶対値と1人当たり値が其々全国一の広東と上海は、鄧小平の意志で経済特別広域の位置付けで加速度的成長を遂げたが、今こそ「首富」を誇る深圳は開発（1980年）前は貧しい漁村であり、上海も漁村から徐々に「東洋の巴里」へと変貌したのだ。江沢民時代の2人の外相 錢其琛と唐家璇の江蘇，上海出身は、党中央対外連絡部部長，外交部次官として対朝外交を司って来た戴秉国の貴州・土家族出身と対照的だが、江南両地が最富組入りを果たした窮極の原動力も最貧組と同質の「窮極」の上昇志向だ。昔から「人無三分銀」（人は3分の銀子も無い）と言われた貴州の貧困は、「天無三日晴，地無三尺平」（3日続く晴天も無く，3尺続く平地も無い）程の環境の悪劣が要因だが、江南も自然に恵まれた様な固定形象とは裏腹に貧寒の側面を抱えたのである。政治・経済・文化の諸分野で占有率や上位度が抜群の浙江を細見すれば、首府・杭州こそ文化的意味で今の上海が自ら冠した「東方明珠」（東洋の翠緑玉 [中国語 = 「祖母緑」] の美称¹⁰⁹) に該当するが、此の山紫水明の観光都市の陰には全省の「七山一水二分地」（7割が山で1割が水 [河・湖]，2割が平地）の構造が有り，浙江人は其の不利な条件の克服の為に勉学に励むのだと告白している¹¹⁰。

金の首領が宋への南侵を決意した一因は杭州の絶景への憧憬だと言われるが、隋煬帝の大運河建造や乾隆帝の南巡を促した揚州の魔力も物凄い¹¹¹。江沢民の「儒・商」因子は故郷の清代の商業・文化の繁栄にも由来したが、揚州が在る江蘇北部の人は20世紀に共産党時代を含めて上海で長らく差別された¹¹²。選りに選って江が上海市長に任命されたのは皮肉な事であるが、蘇北の出稼ぎ労働者が上海底辺の散髪屋・浴場等を支えた歴史から、東京の同じ業界に

出稼ぎが多かった新潟の田中角栄の政界制覇を連想する。江の出自と総書記就任の資本たる「商都」上海での統治は、日・新等に次ぐ中国の飛躍の秘密の一端を窺わせる。周恩来も劉邦・項羽・韓信と同じ江蘇北部で生まれ育った事は、『史記』の世界と通底した中共の「窮変達」志向の徴と思える。佐藤栄作は常に兄・岸信介の陰に居る故に我慢を強いられ、孤独の故に裏返しの傲岸を見せた、と中曽根康弘は評した¹¹³⁾が、山口出身の辺境性や難病が付き纏った苦勞とも無関係でない其の二面性は、指向性こそ違うものの其々周、江に於いて変形が見られた。

「粘着質、自己愛、確信犯¹¹⁴⁾」の屈折を持った小淵恵三と江沢民の間には、田中角栄と周恩来の場合に似た同類+天敵の関係も見て取れる。占領軍司令・マッカーサーに会いに行く時の昭和天皇は頻りに背伸びした¹¹⁵⁾が、物理的身長や政治的弱味は常に健気な頑張りを生み出す。周恩来の母校・天津南開中学から出た温家宝(周の43年後輩に当る1960年卒)の総理就任は、中共政権の超俗世「人縁」(人脈)の政治文化的血縁相関を思わせるが、温と小泉も政治家の血筋の有無の違いは別として妙な一対だ。故郷の天津と横須賀は俱に外圧に因る開国の歴史と関わった港で、横須賀が所在する神奈川の県民所得平均全国第5位も相対的に天津と対応する。小泉の「ファッショ独裁」や「ワイドショー政治」¹¹⁶⁾は張り子の虎の虚勢が多いが、温が就任会見で「穏健な調整型」の評に異論を呈し決断力を強調したのも強迫観念の表現だ。背が低いながら余計に威厳を印象付けたナポレオンや鄧小平の姿も思い浮かぶが、シンクロの世界で欧米人に見劣りする日本選手の悲哀と奮闘は東亜的宿命でもある。身長162^{センチ} 牒以下の選手に減点を課すアテネ五輪代表選考基準の重圧は、皮肉にも世界一の露西亜に肉迫する程の実力を日本に付けさせた¹¹⁷⁾。

田中角栄も学歴の劣等感を官僚操縦の心・技に転じさせたが、其でも昭和天皇に毛嫌いされた¹¹⁸⁾のは人類文化的断層を思わせる。金正日は錢其琛に拒絶反応を示し戴秉国に信頼を寄せていると言う¹¹⁹⁾が、朝鮮の領袖を選ぶスターリンの面接(1946年)で露西亜語の出来る金日成が眼鏡に合った¹²⁰⁾のと同様に、金の露極東生まれと戴の露西亜畑の経歴も含めて、文化的親近感も一因と考えられよう。中国の外相と「党外相」の出自や気質の相異も微妙に影響したとすれば、政治「人縁」や外交関係の等高線の重要性は再認識できる。貴州や同じ最貧地域の甘肅、土家族と同じ少数民族の蔵^{チベット}族が主体でGDP総額が全国最少の西藏^{チベット}で仕事を長年した胡錦濤も、「大漢族主義」の拡大版の「大中華思想」¹²¹⁾で朝鮮を「二等国」として差別する事は無く、寧ろ国内の弱者扶助・共同富裕の路線を此処でも適用するだろう。中朝の今の相剋と共生は同類・同根の故の反撥と理解に他ならないが、究極の利益共同体たる運命共同体の絆には境遇の類似や感情の共鳴が有る。国際社会の孤児・朝鮮へ向ける目下の中国の目線と眼差しには、経験者の時間差付きの「同病相憐」(同病相憐れむ)と「兼濟」意志が有る。

胡錦濤時代の外相・李肇星の故郷・山東は、GDP総額が全国3位で相対的に小泉首相の故

郷・神奈川の全国4位に近いが、昔の山東は貧困の為に東北へ新天地を求める人が多く、東北の発展も山東人の後裔に負う処が多かった。華南の移民と其の子孫が新嘉坡の成長を支えた図式と重なるが、今日の「首富」・広東も20世紀に経済難民が続出した。毛・鄧時代の権力頂点の唯一の広東人・葉劍英も若い頃に、生計を立てるべく香港・新嘉坡・マレーシアに出稼ぎに行った。其の「闖南洋」（南洋進出）は中国に対する「小龍・小虎」の優位を裏付けたが、1920年に16歳で渡仏の途中立ち寄った新嘉坡に特殊な感情を抱いた鄧小平¹²²は、清成祖時代の鄭和「下西洋」（1405 - 33年に東南亜やアフリカ等へ渡った7回の遠洋航行）への礼讃¹²³を以て、国家・民族の「走出去」（世界進出）を肯定した。彼が清の衰退の要因とした自閉は昨今の朝鮮の鎖国と似通うが、国際的孤立から脱出する手本の対米接近の2番目の立役者が葉劍英であった。

当時の外交総帥・周恩来も蘇北 瀋陽 天津の移住を経て日本、西欧に留学したが、仏蘭西時代の仲間・鄧も国際感覚を発揮し天安門事件後の中国の海外復権を導いた。中国はマレーシア首相の「亜細亜経済協議圏」提言に真っ先に同調したが、翌年の鄧小平南巡で促された上海開発や中韓国交樹立の改革・開放加速も、「国際接軌」（国際社会と軌道を接続する）の一環である。国内の山東人「闖関東」（東北進出）も含めて中国人の「闖世界」（天下進出）は、常に「人往高処走」（人は高い処に行く）の法則に沿う。其の対の「水往低処流」（水は低い処に流れる）は利益の出入りと解せば、東亜共同体に対する日本の微温は頷ける。日本人移民後裔のペルー大統領・フジモリは1992年の訪日で、日本の「熱くも冷たくもない」対応に些か失望した。「血は水より濃い」は東西共通の定理¹²⁴ではあるが、貧しい親戚・隣人に冷たいのも人情の裏原理の常だ。「無友不如己者」（自分より劣った人を友にはする無かれ）と言う孔子の教え¹²⁵は向上心の勧めと思えるが、大西部開発戦略に組み込まれた東南亜・南亜・中亜との提携¹²⁶と同じく、先発の諸「龍・虎」の土俵に上り強盛を実現させる可能性が、中国に意欲を湧かせる広域連結の魅力であろう。

地縁的にも政治的にも日・韓乃至東南亜と向き合う国内「第1, 2世界」出身者の指導の下で、中国が東亜共同体の構想に意欲を示したのも、天意に適った人為と考えられる。小泉の「共に歩み、共に進む」と呼応する様に、同じ2002年の中共党大会の合言葉は「与时俱进」（時と俱に進む）と言う。韓国政府首脳が最近同じスローガンを使った事¹²⁷は東北亜の時流を映す同調だが、江 胡の体制交替も同じ頃の盧武鉉政権の誕生も、名実俱に新紀元に入った意義がある。2年後の江沢民の完全禅譲は党・国史上空前の平和的移行だが、建国後50年余り掛かった「和平演進」（平和的変容）²⁸の結果、4世代の指導部は波浪状の前進・螺旋状の上昇を演じた。様々な隔世遺伝的継承・発展の中で、「万变不离其宗」（千变万化でも根本から離れぬ）の枢軸が注目に値する。

国・共両党の同根性は中国歴史の「超安定構造」¹²⁹の産物であり、体制の交替や社会の激動

を超えた其の不易は、中国的思考・行動様式の一貫性も要因と思われる。中国思想の基は『易経』の二元論・弁証法に他ならず、祖形は俗称「陰陽魚」の太極図に凝縮できる。黒と白が内包し合い胎児や雲に映る流体状の2半球は、東洋的奥深さを秘めた一種の「怪圏」(メビウスの環)を成す。内山完造が喝破した中国社会の「表門+裏門」の絡繰¹³⁰⁾は、更に重層的・動的に回転扉と捉え得るが、孟子の「仁者人也」(仁とは人也)や孔子の「政者正也」(政とは正也)¹³¹⁾の「諧音」(語呂合わせ)命題に倣えば、其の枢理は中国語で同じliと読む「理」・「礼」・「力」・「利」に尽きよう。

図6 太極図

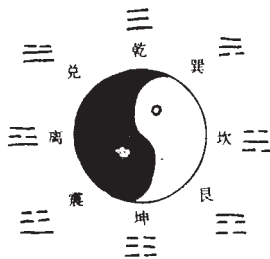
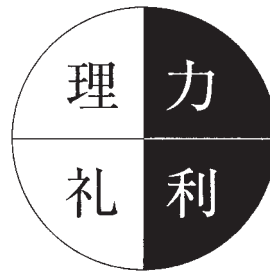


図7 中国政治文化4要諦の概念図



出所 = 王玉徳等著『中華神秘文化』, 湖南出版社, 1993年, 29頁

初出 = 夏剛「“ 儒商・徳治 ” の道 : 理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化 (2)」(註132参照)

此の4要諦は漢字の多義, 漢語的思考の重層に因り, 色々な含みや側面を持ち合わせる。例えば, 「理」は道理・論理と原理・^{イデオロギー}觀念形態, 「礼」は礼義・倫理と秩序・規矩, 「力」は能力・生産力と実力・威力, 「利」は利益・効率と利害・利欲, 等の意を兼ねる。各々には形而上と形而下, 高邁と卑近, 理想と現実, 硬と軟の対が有り, 互いに表裏一体と成る。或る要諦は他の要諦と様々な関連を有し, 柔軟な複合や流動的転換も可能である。全体図に於いて近隣同士は相互内包・補完の組み合わせと成り, 反対側の同様の組み合わせと対立・統一の関係を成すが, 両要諦や両半球の上下, 高低, 表裏, 顕隠は変化し得る¹³²⁾。

『産経新聞』香港, モスクワ, 台北支局長を歴任した岡田充は, 『中国と台湾 対立と共存の兩岸関係』(2003年)の中で, 市場経済へ無防備に移行し政治論争・^{イデオロギー}觀念形態対立が続いた「新生露西亞」の混迷と, 台・中の亜細亜的問題処理法との差を指摘した。後者は要するに, 「政治的な原則を掲げながらも, 経済を重視し実態を優先する中から“ 共通利益 ”を見出す方法である。時には非論理的であり超法規的な世界でもある。キリスト教やイスラム教など一神論に固有な“ 神か悪魔か ” “ 正義か邪か ” の二元論には無い融通無碍な世界であり, これは日

本社会をも貫いている¹³³）。北亜に跨る露西亞や西亞にも在るイスラム圏と峻別するなら、此の虚実皮膜は「東亜的」の名が相応しい。

田原総一郎の『「円」を操った男たち 政財官マネー人脈の暗闘』（1987年）には、其の根柢を成す次の記述が有る。「我々日本人の強靱さ、恐るべき柔軟性、強かさについて、かつて元通産次官の両角良彦が“哲学がないのが日本人の最大の強味”だと指摘した。/“タテマエは只のタテマエで、本音は、要するに得か損かの判断しか無い。そして得に成る事はトコトンやる。損に成る事は絶対にしない。なまじっか哲学、理念が無い為にそれが徹底できるわけですよ”/また、両角の後輩に当る通産官僚は、“戦後、日本人の唯一の拠り所と成ったのは民主主義ではなく、効率主義だ”と言い切った¹³⁴）。「唯物主義」に因んで「唯利主義」と名付けられようが、其の路線と感覚は昨今の中国や古来の中国人にも既視感が有る。

中国人の究極の行動原理は利害を天秤に掛けて決断する事であり、ニクソンも悟った「両害相衡取其輕」（二つの害を量り其の軽い方を取る¹³⁵）は、「権衡」の語義・字面に現れる中国政治文化の実用理性の真髓なのだ。抗日戦争勝利の翌年に各党派代表・識者から成る中国政治協商会議は、和平建国綱領を採択し国民政府改組、憲法改正、国民大会招集を決定する等、国是諮問機関として重要な役割を發揮した。共産党政権の参議院相当の中国人民政治協商会議も其の名を敷衍したが、東亜共同体を巡る協議も利害「衡量」（均衡を慮る判断）に基づく「商量」（相談）でしか無い。

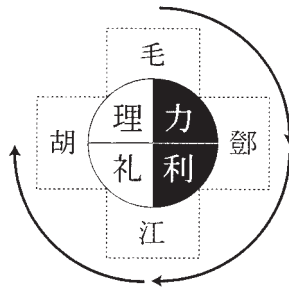
「不拘一格」（格式張らぬ。1つの枠に拘らぬ）の自在は、「文革」の不条理の中の条理に端的に見られた。政争に満ちた造反の「理」が突出する反面、党大会の中央委員会・政治局当選名簿では活字の寸法の違いによって上下の順位を示したり、毛沢東が古参の元帥・高官を議長席最前列の半分に座らせたりして、首長・元老を尊ぶ礼は必ずしも廃れ切れなくなった。或いは、林彪の毛沢東支持の陰の打算や「文革」は収穫が最大最大で損失が最小最小の勘定も利・欲を窺せる。アセアン創設の1967年8月8日は恰度「文革」開始1周年に当り、中国は毛が“all-round civil war”（全面内戦）で表現した武闘¹³⁶）に陥り、「小龍・小虎」に決定的遅れを取り始めたが、其の頃の毛は「副統帥」・林の野望と健康に懸念を抱き、代打者として「資本主義の道を歩む実権派」・鄧小平の再登板を秘かに考えた¹³⁷）。林彪事件後の鄧の復活は党・国の中興の序曲と成ったが、左様な「対衝」は中国・東洋の伝統的智術なのである。

鄧は2人の改革派総書記を解任し民主化運動を腕力で弾圧したが、経済成長を第一義的に重視する姿勢は変らなかった。現実には足を据え且つ未来を見据える両掛け、立場・主座を堅持しつつ歴史・他者と向き合う複眼は、中共建国後4世代の指導部の共通流儀である。冷戦後の秩序再建期の1992年、独逸・瑞典首相等の“global governance”（地球規模の統治）提言が契機で、政治・経済の統治理論が俄然注目を浴びた。「文革」終結（'76年）後の20年間の中国の「人治 法治 徳治」の帰趨は、国際基準への後追いと新世紀理念への先取りに思える。古英

語の governance (統治, 管理, 支配) に対応する中国語の「治理」は, 4 要諦を統治手法と化す妙味がある。

4 世代の治世の力点を其の鍵言葉で表わせば, 毛沢東の「理治 + 力治」, 鄧小平の「力治 + 利治」, 江沢民の「利治 + 礼治」, 胡錦濤の「礼治 + 理治」が思い当たる。何れも前者が主を成す 2 項は時や場合に因り, 其々清濁の両面を含み或いは互いに王道・覇道の対を成すが, 上記図式では理路整然たる「順時針」(時計廻り)の継承・止揚を見せた¹³⁸⁾。今の副次的「理治」は建国当初の基座と重なる様だが, 胡は政治基盤だった共産主義青年団の觀念性を稀薄化した。現政権の合言葉の「執政為民」(民の為に執政する)は, 毛の「為人民服務」(人民に奉仕する)の原点に戻ったが, 「親民」路線の本質は江政権の「徳治」を敷延した「礼治」に他ならない。武功 文治の漸進が到頭実現したのも, 先代の遺伝子を部分的に改良した進化の結果である。

図 8 中共政権 4 世代指導者の統治流儀の力点推移の概念図



初出 = 夏剛「共産党中国の 4 世代指導者の“順時針演變”(時計廻りの移行) 理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化新論」(註 138 参照)

司馬遼太郎は亜細亜専制主義と訣別した功績を理由に, 朴正熙と李登輝を特別に優れた指導者として讃えた¹³⁹⁾。江沢民の直近の禅譲も個人的資質はともかく特筆すべき偉業だが, 此の 3 方は共通の発想体系の枠内に在る。1883 年に朝鮮王朝が国旗の意匠と定め韓国が継承した八卦太極図は, 中国発の「東北亜中心觀念」と言って能かる。 「李」は中国の超「大姓」(使用人口の多い姓), 古代高麗王朝の名, 新嘉坡の初代・現首相父子の姓として, 台湾海峡兩岸と朝鮮半島, 大中華圏の人・文化の縁を感じさせる。「台湾人の心情, 日本人の発想, 欧米の価値観を持ち, 中国的社会・文化背景の中で生きる」と言う¹⁴⁰⁾ 李登輝の複雑系は, 其の姓と同音の 4 要諦の多面政治の本質を窺わせる。

改革・開放を巡る「姓“社”姓“資”」(姓[性質]は「社」[社会主義]か「資」[資本主義]か)の論争の中で, 鄧小平は 1992 年南巡中に上海の電子産業視察で輸入機械を指差して言っ

た。「此の設備は資本主義国家で作られたので元は姓が“資”だが、今は社会主義の為に働いているから姓は“社”に成る。“資”は“社”に転化し得るし、“社”も“資”に転化できる¹⁴¹⁾。」訪ソのニクソン対フルシチョフの「厨房論争」(’59年)を連想させる名台詞だが、「白い猫でも黒い猫でも、鼠の獲れる猫が好い猫だ」とする彼の实用主義は、戦後日本の原理無き効率至上主義・「唯利」路線と同工異曲である。中国の資本主義的社会主義と日本の社会主義的資本主義は好一对だが、同じ「黒猫・白猫」相互内包の東亜的独裁開発・専制成長は、日本的「中空・頂空」(中心・頂点の空虚)と違う「中控・頂控」(中心・頂点の「控制」[制御])の構造¹⁴²⁾を持つ。

7. 欲望や「龍虎闘」¹⁴³⁾を抑える「鳥籠経済・鳥籠政治」の東亜的普遍性

蔣経国が38年も続いた台湾全土戒厳を解除した翌々年、中共建国後初の戒厳令が西藏と北京で相継いで発動された。「政治風波」への武力鎮圧は時代への逆行として域外の指弾を受けたが、韓・台を追って民主化へ向う雁行型進化の一環と見做せば、感情的・道徳的断罪を超える勘定・是非の判断も色々出来よう。李光耀は韓国やイスラエル、南ア等の殺傷回避型鎮圧の日常化を例に、戦車出動・集団発砲の異常を指摘した。彼は天安門事件を中国史上の「匪夷所思」(摩訶不思議)の一章と捉え¹⁴⁴⁾つつも、其の「匪夷」(非正常。「匪」=非、「夷」=易[通常])を「匪・夷」の変行¹⁴⁵⁾として譴責しなかった。同じ「華族社群」(華人種族)の香港や台湾より弱い新嘉坡の民衆の反撥を、彼は共産中国との政治的関係の遠近に因る反応と観た¹⁴⁶⁾が、彼一流の大局的歴史観は此処でも光っている。

李光耀は天安門事件に於ける鄧小平の功罪に就いて、過激な処理でなければ死後もっと西側に賞賛されたはずだと言う遺憾より、百年動乱の芽を摘み取って置く決意への理解の方に傾く。¹⁴⁷⁾彼は20世紀世界史の摩訶不思議の一頁　ソ連解体と較べて、改革・開放と鄧の巨大で希望に満ちた遺産に因り、中国は数十年の明るい展望が出来たと観ている¹⁴⁸⁾。李は1990年の訪ソでゴルバチョフのお人好しと書齋派に呆れ、賢明な鄧の経済再建優先と逆の政治改革先行は大間違いだと思った¹⁴⁹⁾。彼は「ベレストロイカ改革・グラスノスチ透明」の旗を掲げた鳩派総書記の無邪気・無策に憐憫を抱き、1996年大統領選挙で得票1%未満の末路を「民衆に唾棄された」と斬った¹⁵⁰⁾。中国官民の見地との接近は新・中の遠くて近い関係に符合するが、趙紫陽と鄧小平が俱に共鳴した「新權威主義」の「強人政治」¹⁵¹⁾は他ならぬ李光耀流統治の真髓だ。

天安門事件は約30年の日中発展時差の座標系に入れて観れば、1960年の同じ6月4日に労働組合等560万人が参加した安保闘争と重なる。自民党が国会で新日米安保条約を単独で可決したのは北京戒厳令発布と同じ5月20日の事だが、6月15日の改正阻止第2次実行使(580万人参加)に見た別の暗合は、全学連主流派が国会に突入し警官隊との激突で東大生が虐殺さ

れた事だ。閣議で通産相・池田勇人等が自衛隊の出動を強く主張したが、防衛庁長官の抵抗と岸首相の躊躇に因って、同年4月韓国の打倒李承晩市民革命の際の首都戒厳や29年後の北京の「血の日曜日」は回避された¹⁵²⁾。中曽根康弘は「総理の一念は“一種の狂気”」の比喻で指導者の決断の真剣さを形容した¹⁵³⁾が、真剣(実弾)を使うか否かの「一念之差」(一念の違い)で、両国は其の歴史の転換点で明暗が分れた。

2000年五輪開催の競争で北京が僅差でシドニーに敗れた事(1993年)は、武力鎮圧に対する世界の不快・不信の結果とも取れる。但し、6・4惨事に衝撃を受けた末に大陸から遠ざかった司馬遼太郎も、敗戦直前に戦車部隊と共に首都防衛の為に北上する際、民衆が道を塞がった場合の対応を大本営から来た上官に訊くと、普段温厚な相手は即座に「轢っ殺して置け」と答えた。同胞への非情を悲しんだ彼は後に自分の考えが間違った事に気付き、軍隊は本質・機能として具体的自国民を守る物ではなく、守る対象は抽象的国家或いは基督教の為といったより崇高な目的だ、と書いた¹⁵⁴⁾。批判を込めた論断だとしても国家機器の冷徹さを客観的に捉えており、現に米国も9・11の非常事態で問答無用の民間機撃墜を決意したし、独逸でも国家の手で市民の命を奪う違憲の懸念が大統領から提起されたにも拘らず、乗っ取り機の撃墜を認める「空の安全保障法」が発効した(2005年1月15日)。

「文革」も顔負けのボル・ポト政権の大虐殺等を含めて、冷戦時代の悲劇は東亜の国・地域の内外に感情の溝を遺して来た。国際謀略説が絡んだソ連極東空軍の大韓航空機撃墜(1983年)も想起されるが、「北極熊」の「熊気」(野蛮・愚直)と東亜的「虎気」(勇猛・非情)の結合に注目したい。李光耀は趙紫陽が忽ち無名の人に成った結末をソ連式とした¹⁵⁵⁾が、鄧小平・蔣経国が同時('26年)ソ連に留学した事も中ソ、国共の同根を思わせる。胡錦涛時代に成っても趙が外賓と会えない状態が続いているのは、蒋介石が張学良を数十年も軟禁した事と一部だぶる。「放虎帰山」(虎を山に帰す。危険人物を野放しにする)の懸念に因る無力化は、自らの性格の主な部分とした毛沢東の「虎気」が東亜で普遍的に強い事の裏返しでもあるが、趙は張と同工異曲で自ら「鳥籠」に嵌まった節も否めない。張は東北人の義侠心から贖罪の同行を決意し蔣の罠に引っ掛かったが、転向を最後まで拒絶した趙の抵抗も愚直な河南人らしい。胡耀邦失脚の「宮廷政変」(1987.1.16)の17年後の2005年1月17日、彼は天安門事件の際の鄧小平と同じ85歳で失意の内に他界した。張の存命中の完全自由の実現と比べるまでもなく、江沢民が唱えた「政治文明」の落後の現状や歴史的汚点を許した中共の限界が露呈した。趙は命の果てに現政権も含む党の無原則を嘆いたと言われる¹⁵⁶⁾が、戦後日本の「唯利」路線との暗合は存在の合理性も有ろう。

中共「経済戦線」の大御所・陳雲は1982年に「鳥籠経済」の名で、経済に一定の規制と適切な自由を与えよう唱じた。其の計画経済と市場経済の結合に由り国家と市場は緩やかな連結体と成ったが、改革・開放期の国の意志と民の欲望に対する調整・制御は「鳥籠政治」とも呼

べる。鄧小平の「放」（政治的開放，経済成長の加速）+「収」（引き締め）の二刀流，趙紫陽が共感した「新權威主義」は，俱に「政」の「正+攵」の字形通り鞭を半分使う。瑞西建築家と中国建築設計院が合同設計した北京五輪主会場の「鳥籠」構造は，「奇を衒い過ぎ」「景觀破壊」の批判を浴びながら謀らずも中国社会の縮図なり得るが，9.11襲撃で倒壊した世界貿易中心ビルセンターの脆弱な鳥籠構造と違う中国的強靱さが朱色に表出される。天安門事件の際に鄧小平の言として流れた「20万人の犠牲で20年の安定と引き換える」は，後に香港筋の報道では王岐山が言い出し上層部が共鳴したとされた。¹⁵⁷⁾ 海南省から首都への緊急異動後 SARS 退治で辣腕を揮った王は，北京市長として次回五輪開催を仕切る事に成るが，噂の真相はともかく2008年まで正に約20年の安定が保ちそうだ。

一部の人命よりも国の長期的安定を取る極論への反撥は，西側の価値観と異なる中国的現実主義を映して徐々に弱まった。社会動乱や国家解体の回避，生活向上の果実は，欠乏欲求の達成に精一杯の群衆には其ほど有り難かった。建国後初の戒嚴令（1989.3.8）を西蔵チベットで発動した胡錦濤が新世紀初頭の領袖に成った事は，乱治の因果や必要からすれば自然な帰着とも言える。中国発の破天荒の怪病と戦う「硝煙無き戦争」で身を挺した彼の気概は，戒嚴軍と共に拉薩ラサの街頭に出た面影と通じる。其の年の「平定暴乱」の是非・得失は，上海市長・朱鎔基の6.4談話の通り何れ歴史が裁決するのだが，鄧小平が其の一昔（10年前）に決意した超法規的作戦と併せ観よう。李光耀は其の国際的評価が芳しくない対越南懲罰に感謝し，遣ってくれねば越南は東南亜フロンシアの普魯西に成っていたと述べた¹⁵⁸⁾。

二クソンは『指導者とは』（1982年）の中で，偉大な指導者の3条件として偉大な人物・偉大な国家・偉大な機会を挙げた¹⁵⁹⁾。彼が最も高く評価した東亜の指導者は周恩来と吉田茂だ¹⁶⁰⁾が，もう1人「小舞台の大俳優」として特筆したのが李光耀だ。同じ弁護士出身の濠首相・メンジースと同様に広い世界観・大局的判断力を持ち，俱に元英殖民地の小国を率いながら，時代や舞台が変ればチャーチル並みの功績を遺し得る，と言った絶賛ぶりである¹⁶¹⁾。大統領就任（'69年）直後に世界一周の調査の出た財務長官は，新嘉坡は世界で最も好く治まっていると報告した¹⁶²⁾ので，規模や実力で他国を見下しがちの米国指導者¹⁶³⁾も刮目して見たわけだ。彼は李の精力や大きな天地を求める意欲を「檻の中の獅子」で形容した¹⁶⁴⁾が，獅子が象徴物なる其の国の大成は正に「鳥籠」めく「獅子檻」統治に依る。

新嘉坡で車に落書きした15歳の米国少年が鞭刑に処され，米国輿論の抗議とクリントン大統領の嘆願でも僅か6回から4回に減免した。1993年の其の「文明の衝突」で亜細亜の法治は野蛮の印象を与えたが，松下幸之助が領けた「教」の「孝+攵」の字形の寓意は，其の鞭に由る究極の青少年教育で忠実に体现された。中国の諺は「棒打出孝子」（棍棒の敲きから孝行息子が出る）と言うが，毛沢東は死の4ヶ月前に最後の外賓の1人として李光耀と会う直前に，天安門広場の大衆反「文革」示威を棍棒で敲き潰す事に同意した。第2次天安門事件の発砲は

彼の「槍桿子里出政權」(銃から政權が生まれる)説を実践したが、孔子も礼制を破り天子の尊嚴を犯した非礼を、「是可忍也、孰不可忍也?」(是も堪忍できるなら、堪忍できぬ事はもう無かろう)と咎めた¹⁶⁵⁾。東洋一の法治国家・新嘉坡の嚴罰主義と鞭刑は皮肉にも、英・日殖民地時代の恐怖統治の遺伝子を持つ¹⁶⁶⁾。「安樂椅子よりも狩獵用の携帯銃座に坐る」、「新嘉坡は鋼鉄製の銃座以外に何物も待たぬ」と言う、李の国民教育の論断はニクソンに強い印象を与えた¹⁶⁷⁾が、毛の「槍桿子里出政權」と鄧小平の「鋼鉄公司」¹⁶⁸⁾とも通じる。

ニクソン訪中の際の連合赤軍籠城浅間山莊攻略等の実績で、1986年内閣官房安全保障室初代室長に就任した佐々淳行は、東大安田講堂落城('69年)を指揮した成功の一因として、香港出向中に見た英国当局の「文革」派暴動への果敢な平定の示唆を挙げたが、彼も言った通り「殺鶏嚇猴」(鶏を殺して猿を嚇かす)の手法¹⁶⁹⁾は他ならぬ中国流だ。棍棒に由る準武力鎮圧を辞さなかった当時の日本と香港、スハルトの要請を拒絶してインドネシア人犯罪者を処刑した('68年)新嘉坡¹⁷⁰⁾、文字獄を長らく断行した台湾海峡兩岸¹⁷¹⁾、光州事件('80年)で後の天安門事件に勝つとも劣らぬ冷血を見せた韓国¹⁷²⁾、権力維持の為に数十万人単位の反対勢力抹殺やテレビ中継の中の政敵殺害を憚らなかつたインドネシア('65年)と比律賓('83年)¹⁷³⁾、此等の「龍・虎」の高成長は形態や程度の差こそ有れ開発独裁か硬性管理の性質を帯びた。「政治文明」の理想に距離が有るとして胡錦涛政權に失望する向きも有るが、言論統制の傾向は亜細安^{アセアン}で今も猶残っている。

陳雲は治安強化・党紀肅正の方策として極刑に由る「殺一儆(警)百」を力説した¹⁷⁴⁾が、日本流の「一懲百戒」より殺気が立つ此の成語は、中国の支配者の「大開殺戒」(大いに殺人の戒律を破る)の背景を覗かせた。体制の強硬な制御と儒教の柔らかな誘導は同工異曲の鳥籠の様に、何れも「鳥」の欲・力と正比例に用意される物だ。政治改革の本格的起点が建党百周年の2021年頃に設定された¹⁷⁵⁾のは、高度成長の達成を意識の現代化の保障とする処が歴史的唯物主義らしいが、其の前の5.4運動百周年と建国70周年('19年)と合わせて、観念と現実の相互改造や構造更新に数世代が要る法則に合う。反封建・反帝国主義の5.4運動が近代史の起点と成り、其の70周年記念行事の趙紫陽演説が民主化運動に点火し、平和的台頭への移行で最大の陣痛を起したのも、黙示録的教示を含んでいる。

中国の「4つの現代化」の目標は建国10周年の頃に提起され、建国15周年の直後に正式に掲げられたが、孔子の人生の最初の節目も「十有五而志於学」(十五にして学に志す)だ。次の「三十而立、四十而不惑、五十而知天命」(三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知る)は、其々建国30、40、50周年の改革・開放起動、天安門事件、澳門返還に暗合する。終戦を新生の起点に日本や東亜全体に当て嵌めれば、1960、75、85、95年に様々相応の事象が思い当たる。東亜首脳会議の2005年発足は其の干支一巡の再出発に当るが、本卦返りの還暦が「耳順」の年である事も興味深い。情理に適う言葉を素直に聞き入れる謙虚さは、儒

家の教祖に人格修練の終点の一步前と規定されたが、終戦60周年の直前に域内の一部が互いに聴く耳を持たぬ状況は、警句の「行百里者半九十」（百里を歩く者は九十里を半ばとす）の通りだ。

最後の「七十而従心所欲不逾矩」（七十にして心の欲す所に従い矩を^こ逾えず）は、言わば自ら「鳥籠」を設定し適度の自由を楽しむ境地である。90歳（1994年）頃の鄧小平の政治的名人芸は長男・鄧朴方に「炉火純青」と形容された¹⁷⁶）が、火の最高の燃焼が赤ならぬ青で現れるのは「淡化」（稀薄化）の逆説だ。耳順の「心平气和」（心が平穩で気分が和む）は其の器量・涵養の前提と成るが、改革・開放の成功も賢明な指導者の耳順の賜物が多い。反^{アセアン}亜細安のマレーシア・インドネシア共産党への支持の弊害を指摘された鄧小平は、私にどうして欲しいですかと李光耀に訊き相手を驚かせた。後に華南での両党のマレー語地下放送の閉鎖に繋がった其の反応は、李の述懐通り共産党領袖にしては驚天動地の事なのだ¹⁷⁷）。日朝首脳が還暦の直後に対話の席に着いた事が示す様に、虚心坦懐の対話が東亜融合の第一歩である。

1946年生まれの盧武鉉を始め戦後世代の指導者が今の東亜に多く、中でも東南亜の最富・最貧国の首領の等高線が目を引く。李光耀の長男・李顕龍は2004年に52歳で新嘉坡第3代首相に就任し、同年にカンボジアのシハモニ（51歳）は李光耀と同じ81歳の父・シアヌクから王位を継いだ。陳水扁（1951 - ）も属する朝鮮戦争世代が「東亜共同体元年」¹⁷⁸）に登場か再登板したのは、前年のマハティール（77歳）が22年務めた首相を63歳の副首相に譲った事と共に、大戦・冷戦時代の烙印の稀薄化を促す時流が感じ取れる。50代でも精神的成熟に困り耳順の次元に達し得る一例は、鄧小平訪新の翌々年（1980年）に54歳の江沢民が新嘉坡で行なった考察だ。国家輸出入管理委員会・外国投資管理委員会次官だった彼は、経済開発庁の幹部に高度成長の秘密を執拗に訊ね、最後に「商業環境風險」（事業環境リスク）指標の説明と「政治的信用+経済の生産力」の方程式に納得した。¹⁷⁹）

country risk（国家投資風險）の重みに目覚めた開眼とも思われるが、其処で悟った「信用を売る特技」の実践の成敗はともかく、実績を真理の唯一の判断基準とし大国の矜持を捨てる姿勢は成長に繋がる。江が新嘉坡で先進国の啓蒙を受けた事は、其の国の「鳥籠統治」の成功を考えれば意味深長である。昨今の中国の社会主義の体制+資本主義的流儀を最強の複合と見る向きが多いが、秩序維持の為に自由・欲望を適宜に抑制する新嘉坡が手本の一部のはずだ。新嘉坡も「姦淫」（日本の殖民支配）や「離縁」（マレーシアからの分離）の経験で、血縁関係の濃厚な中国と同質の複雑で成熟した智慧を増した様に思う。李光耀は新嘉坡の基盤建設に対する華南の出稼ぎ移民の寄与を強調した¹⁸⁰）が、新・中の凄まじい飛躍や其を保障する必要悪の断行の根底には、中国的「一勞永逸」（一度の苦勞で永久の安逸を享受する）の貪欲・忍耐が多々有ろう。

東亜の奇跡は専制と欲求・^{バランス}均衡感覚の結合に負う処が大きく、家長制的牽引と我武者羅^{がむしゅら}な疾

走で生産・財富の拡大を追う内に、自ずと繁栄・平和に転化する様な雁行形態も見られた。発展を「硬道理」(絶対的真理)とした鄧小平の論断の通り、東亜は成長を至上命題に矛盾を承知で猛進し続ける傾向が有る。日本の泡沫経済崩壊や東亜の通貨危機は傾斜の代償とも思えるが、一時的頓挫が生じても生存に響かぬ程の蓄積や再生産力が出ていた。韓国が1998年金融危機の際に投入した公的資金はGDPの3割、国家予算の1.5倍に当り、日本の同GDP 2%と比べて大変さを強調する向きも有る¹⁸¹⁾が、程度の差こそ有れ孟子の「有恒産者有恒心」(恒産有る者は恒心有り)の定理の通り、両国が必死に作った資本が全滅を防ぐ安全装置として働いたわけだ。

孫文は逝去の前年(1924年)の訪日中の講演『大亜細亜主義』で、亜細亜の伝統は欧米の覇道と対照的な王道文化だとし、日本は王道を歩み亜細亜の干城と成るか覇道に走り西洋の番犬に成るかと問い掛けた。其の聲は80年後の米英聯軍イラク侵攻の際に甦って来たが、盾・城から護衛者に転義した「干城」は、出典の『詩経』第1篇「周南」の「赳赳武夫，公侯干城」(赳赳たる武夫，公侯の干城)の通り、武装で自ら固める強硬な意志を含む。「赳赳武夫」は奇しくも田中角栄後の2首相 三木武夫，福田赳夫の名を内包するが、蒋介石が長男の幼時教育に使った『詩経』¹⁸²⁾は日本で馴染みが薄いものの、2人の生まれた1907, 05年と日本の軍国主義化の起点との吻合を考えれば時代精神を感じる。覇権軍国を目指す「猛牛」¹⁸³⁾日本は「泥牛入海」(泥の牛が海に入る。行った^き限りで消息が無い)の破目と成った¹⁸⁴⁾が、戦後日本の「経済動物」化を始め東亜諸「龍・虎」は仁義無き抗争を繰り上げ、言わば覇道を経て王道へ辿り着いた例が多い。東亜共同体の結成も相思相愛の成り行きや綺麗事の理念先行は無理で、利害衝突の中で共栄の妥協点を探る「先結婚，後恋愛」(先ず結婚し，後で恋愛する)方式が現実的だ。

東亜は人本主義の伝統から否応無しに人治の色彩が濃厚だ¹⁸⁵⁾が、指導者の鶴の一声は好い結果をもたらす場合も有る。日中・日朝の関係正常化は俱に独断型首脳同士が実現させ、毛・田中と金・小泉の失政は此の歴史的功績を損ねるまい。東亜共同体の形成でも各方面の国家意志は逆風と順風の両方に成り得、互惠の利得が明確に認識された場合には「自上而下」(トップ・ダウン)の速決の機会も多い。利害の不一致に因る平行線状態も長い眼で観れば、何れ均衡・収斂の末に「雁行」の帰着で交合するだろう。孔子は国家維持の3要素を順次に捨てざるを得ないなら先ず武装，次に食糧で，信用は「民無信不立」(民，信無くば立たず)故に最後まで遣す，と言った¹⁸⁶⁾が，欲求階層で上に行くほど下方の価値が遞減すると言うマズロー説に合致する。其と表裏一体の孔子の「庶 富 教」は「威 信」の化合物であり，信が出来た後に威は主役から裏付けへと後退するわけだ。天安門事件の際に喫緊の安保の為に劇薬を投入した中国も，其の後は内外で信認確立の為に低次的利益の犠牲を惜しむに至った。

食糧・武装の強化で強盛を図る朝鮮も最終的に王道を望むはずだが，米国の兵糧攻めは窮鼠

と化させ元も子も無くなる恐れが強い。金正日は2000年南北首脳会談直前の秘密訪中で天安門と联想集団を参観したが、政治強権と経済飛躍の象徴の対から中・朝双方の「鳥籠」志向が窺える。政府系研究機関・中国科学院の研究者が1984年に起業し、中国パソコン企業の最大手に成長した联想集団は、2004年末に「小吃大」（小が大を食う）手法で米国IBMのパソコン部門を買収し、一躍に富士通、東芝・NEC等を跳び越して亜細亜最大、世界3位と成った後、ブランド力を高める為に米国人を最高経営責任者（CEO）に迎えたが、朝鮮の経済特区長官の外国人起用も似た路線である。ニクソンがドゴールの言を借りて指導者の資質に挙げた超道徳的権謀と誠実の使い分け¹⁸⁷⁾も、正当な目標の為に手段に拘らぬ柔軟性である。米国が其の二重基準を実践した一例として、天安門事件の直後に大統領密使を派遣し鄧小平と意思を疎通した¹⁸⁸⁾。本格的制裁に加わらぬ日・仏・新と違う道を辿りつつ、中国の平和的変容を促し東亜の漸進的前進に寄与した。

（未完）

2005年2月3日

[附記] 本稿は、国際シンポジウム「東アジア共同体の構築を目指して」での報告（2005年1月22日、於立命館大学）の基を成す論文の政治文化部分の最初の3分の1に当る。

注

- 1) ソ連経済学者・コンドラチェフが1925年に提起した世界経済長期循環の周期は、45 - 70年と幅が有り一般的に50 - 60年とされる。19世紀以来の数回の山と谷の時期は諸説が微妙に違うが、文中の規定は多くの文献に拠る。
- 2) ロジャースの中国に対する楽観論は、“*Investment Biker*”(1994年。日本語版 = 林康史・林則行訳『大投資家ジム・ロジャーズ世界を行く』、日本経済新聞社、1995年)以来一貫しており、米ドル悲観論は2003年以降、日・中を含めて世界各地で力説し続けて来た。
- 3) 『週刊東洋経済』2004年1月31日号特集(30 - 45頁)の題・「20年ぶりの大相場 鉄、金、小麦……国際商品高騰の裏に 中国“爆食”」。
- 4) 「世界の工場」と対を成す「世界の事務所」は初出が不詳であるが、英語力とIT時代の通信の利便を武器に米国企業の事務処理を請け負う印度の驚異的市場占有を言い得て妙だ。
- 5) 『日本経済新聞』2004年11月30日。
- 6) 台湾の新聞・雑誌・書籍で度重ねて報じられて来た公然の秘密。岡田充『中国と台湾 対立と共存の兩岸関係』(講談社現代新書、2003年)に詳述有り(113 - 117頁)。
- 7) 中共政権初代軽工業相・黄炎培(野党所属)から「支援軍」の政府色の危険を指摘されて、毛沢東は同音の「志願軍」に修正した。越南戦場で使った「中国後勤部隊」の名称は命名の経緯が不詳だが、范碩『葉劍英在非常時期 1966 - 1976』(華文出版社、2002年)等に出ている。
- 8) 朱建荣著『中国 第三の革命』(中公新書、1997年)に拠れば、当時ネット上で少なからぬ中国人から不満が書き込まれ、我々は何の為に戦ったのかと言う声も出た。(196頁)

- 9) 銭其琛は『外交十記』(世界知識出版社, 2003年)の中で, 金日成に中韓国交樹立を通告する気の重い旅を回顧した。説明を聞いた金が最小限の理解しか示さず, 其の一行に破天荒の宴会抜き
の冷遇を施した事(157 - 159頁)に, 朝鮮の立腹ぶりが窺われる。

猶, 上村幸治の「胡錦涛が差し向けた2人の‘密使’ 金正日追放 中国がついに下す」に拠れば, 当時朝鮮側関係者から一行に向けて灰皿が飛んだ。(講談社『現代』2003年10月号, 39頁) 因みに, 司馬遼太郎の次の言と照らし合わせれば, 其の激憤は一層実感できる。「あんな時代は日本ではない。 / と, 理不尽なことを, 灰皿でも叩きつけるようにして叫びたい衝動が私にある。」(『この国のかたち』第4回「“統帥権”の無限性」, 『文芸春秋』1986年6月号)

- 10) 江沢民は第16回党大会(2002年)で, 人民に対する空前の「实惠」提供を執政13年の大きな実績として宣揚した。
- 11) 魯迅詩『題三義塔』(1933年)。日本語訳 = 高田淳(高田淳『魯迅詩話』, 中公新書, 1971年, 178頁)
- 12) 渡邊恒雄『渡邊恒雄回顧録』, 中央公論社, 2000年, 155頁。立花隆は『「田中真紀子」研究』(文芸春秋, 2002年)で, 此を引用し賛成した(50頁)。
- 13) ニクソンは『指導者とは』(1982年)の終章「指導者の資格に就いて」で, 「邪悪」も含む泥臭い人間性を次の論断で肯定した。「陰険, 虚栄, 権謀術数などは一般的に悪とされるが, 指導者にはそれは無くては成らない。或る種の陰険さが無ければ, 互いに対立する派閥を纏めて行くという政治に不可欠な仕事は出来ない。或る程度の虚栄心が無ければ, 国民に自己の地位を正しく印象付ける事は出来ない。そして権謀術数を用いなければ, 大事に当って目的を達成できない場合が多いのである。」(日本語版[徳岡孝夫訳, 文芸春秋, 1986年]365頁)
- 猶, 『領袖們』と題した中国語版の中国に於ける共鳴の一例は, 元護衛長・李銀橋が披露した毛沢東の人間像『走下神壇の毛沢東』(権延赤, 中外文化出版公司, 1989年)の引用(20 - 21頁)だ。
- 14) 佐野真一『凡宰伝』, 文芸春秋, 2001年, 236頁。
- 15) 銭其琛『外交十記』第8章(243 - 288頁)の題。
- 16) プリンストン大学教授・歴史学者の余英時は, 西方に対する近代中国人の感情を「羨憎情結」と表現した。(安琪『中国民族站起来? 政治転型的民族主義遡源』, 香港夏菲爾出版有限公司, 2002年, 25頁)
- 17) 李光耀『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 新加坡連合早報出版, 2000年, 668頁。
- 此の書物は日本語訳も有る(小牧利寿訳, 日本経済新聞社, 2000年)が, 本稿で中国語版に依拠した理由は2つ有る。第一は訳者が断った(573頁)通り, 日本の読者に解り易い様に改編が施された事だ。又, 「匪夷所思」(註145参照)の類いの中国語の妙味が出ない故である。
- 18) 西太后や蒋介石が内外の異族や異端への不信を表わす言葉として, 「非我種族, 其心必異」が伝えられた。
- 19) 小稲義男等編『新英和中辞典』第5版(研究社, 1985年)の語釈。
- 20) 黄文歡^{ホアン・ヴァンホアン}『滄海一粟 黄文歡革命回憶録』(解放軍文芸出版社, 1987年)265頁等。朱建榮『毛沢東のベトナム戦争 中国外交の大転換と文化大革命の起源』(東京大学出版会, 2001年)19頁
拠り。
- 21) 日本では此の竹中見解に対して, 批判の声も上がっている(須田慎一郎『巨大銀行沈没 みずほ失敗の真相』, 新潮社, 2003年, 218 - 219頁)。

- 22) NHK「街道をゆく」プロジェクト『司馬遼太郎の風景 長州路・肥薩のみち／本郷界限』、日本放送出版協会、1998年、43 - 44頁。
- 23) 毛沢東の訪ソでスターリンが故意に長らく会見しなかったのは、毛の立腹と共に有名な話である。金日成が国際首脳会議で椅子を用意されなかった云々は、日本の月刊誌論文で未確認情報として引かれた風説だが、真偽はともかく小国の悲哀は頷ける。
- 24) 第3回党大会（1956年）で専制体制を敷いた金日成は、中国国防相・彭徳懐とソ連外相・ミコヤンの勸告も聴かず、1957 - 58年に指導部内の「延安派」と「ソ連派」を肅清した。（金学俊著、李英訳『北朝鮮五十年史 [金日成王朝]の夢と現実』、朝日新聞社、1997年〔原典 = 1995年〕、209 - 211, 213 - 219頁）
- 25) 鄧小平は日本外相・園田直との会談（1978年8月10日）で其の憤懣を披露した（石井明・朱建栄・添谷芳秀・林暁光編『記録と考証 日中国交正常化・日中平和友好条約締結交渉』、岩波書店、2003年、187頁）。権延赤・杜衛東著『共和国密使』（光明日報出版社、1990年）でも、1966年末の話として越南軍が「伝統教育」で古代中国の侵略を取り上げ、中国の支援部隊に不安・不満を覚えさせた事例が有る（245頁）。
- 26) 李光耀『李光耀回憶録 1965 - 2000』、670頁。
- 27) 周恩来は秘密訪中のキッシンジャーとの1回目の会談（1971年7月9日）で、越南人民を「偉大で英雄的で賞讃に値する人民」とした上で斯く述べた。「二千年前に中国は彼等を侵略しましたが、2人の女性将軍によって敗退させられました。私が新中国の代表として北越を訪れた時に、此の2人の墓に詣でて、搾取る側の我々の先祖を撃破した女性英雄に敬意を払い、花輪を捧げました。」（ニクソン大統領文書プロジェクト・国家安全保障会議ファイル編纂〔2002年〕、毛利和子・増田弘監訳『周恩来 キッシンジャー機密会談録』、岩波書店、2004年、19頁）
- 28) 光武帝の命を受けた太守・蘇定が原住民部落の首領を殺害し、馬援は暴動を起した未亡人姉妹の征索・征伐の命を落とした。周恩来は訪越中に2人の記念碑に献花し、毛沢東も「文革」初めに駐外大使等との懇談で「二征」を賞讃した（権延赤・杜衛東『共和国密使』、257 - 258頁）が、同時に馬援の「名将」の評価を繰り返した。毛が推進した国家的文化事業の『辞海』（上海辞書出版社）の「馬援」の項も、其の件を淡々と「鎮圧」で表現するのに止まった。
- 29) 黄諍『中越関係史研究輯稿』（广西人民出版社、1992年）。朱建栄『毛沢東のベトナム戦争 中国外交の大転換と文化大革命の起源』20頁掘り。
- 30) 1960年代初めにアフリカ某国の革命勢力の要請で、中共中央・中央軍事委員会は某中將を軍事顧問として派遣しようとしたが、本人は犠牲を忌み嫌ったのか任命を拒否した。毛沢東は遺憾な気持ちで『後漢書・馬援伝』を高級幹部に推薦し、周恩来も毛が引いた此の2句を以て会議で其の抗命を糾弾した。（権延赤・杜衛東『共和国密使』、3 - 4頁）
- 31) 蕭偉基・董清峰・張紫蘭「台湾YES！去中国化NO！」、香港『亞洲週刊』2004年3月14日、39頁。
- 32) 中曽根康弘『自省録 歴史法廷の被告として』、新潮社、2004年、232頁。
- 33) 蔣立峰「東北アジアの安全保障と発展の問題について」、徐勝・松野周治・夏剛編『東北アジア時代への提言 戦争の危機から平和構築へ』、平凡社、2003年、216頁。
- 34) 他国の経済危機に対する買い支えの絶大な恩恵効果は言うまでもないが、新嘉坡は1997年亜細亜金融危機で地域安全装置の役割を果たしただけで、米国の好感を買い米国少年鞭刑事件（本文参照）以来の関係悪化の改善に繋がった。（『李光耀回憶録 1965 - 2000』、552頁）

- 35) 中国の有人宇宙飛行に対して石原慎太郎等は時代遅れと軽視したが、政治的・軍事的・技術的意義への過小評価を警告する意見が、間も無く軍事専門家等から発せられた。ソ連の先駆的成功は李光耀に技術大国の威力を感じさせた(『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 490頁)が、今だに其の影響が遺っていると李の露西亜観は常識的観方であろう。
- 36) 日本の株式相場用語として、収斂した膠着状態から脱し上放ちか下放ちに成る事を指す。
- 37) 司馬遼太郎『この国のかたち』第3回「“雑貨屋”の帝国主義」(『文芸春秋』1986年5月号)。
- 38) ナイ著、山岡洋一訳『ソフト・パワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』, 日本経済新聞社, 2004年(同原典), 26 - 34頁。
- 39) 陳舜臣『儒教三千年』, 朝日新聞社, 1992年, 213 - 216頁。
- 40) 武田泰淳の随筆「滅亡について」(1948年), 武田泰淳『新編 人間・文学・歴史』(筑摩書房, 1966年)所収, 9頁。
- 41) 竹内実『中国 欲望の経済学』(蒼蒼社, 2004年)等。
- 42) 毛沢東の「窮則思変」(窮乏すれば変革を考える)は、『易経』の「窮則変」(窮すれば変ず)を擬った命題である。李登輝は1994年夏から1年掛けて、専門家の『易経』講義を週に1回ほど受け、『台湾の主張』(PHP研究所, 1999年)で所感を詳述した(38 - 41頁)。
- 43) 李登輝『台湾の主張』, 92頁。『読売新聞』1999年8月11日。
- 44) 胡鞍鋼の国内「四個世界」の規定では、「第1世界」は上海・北京・深圳等の高所得発達地域で、直近の1人当り域内総生産が世界の所得上位中級の国・地域よりも高い；「第2世界」は天津・^{クラス}広東・浙江・江蘇・福建・遼寧等の大・中都市、沿海の所得上位中級地域で、同数値が世界の下位中級より高く上位中級には及ばぬ；「第3世界」は沿海地域の内の河北・東北・華北中部の一部を含む所得下位中級地域で、同数値が世界の下位中級の平均を下回り世界の第100 - 139位の間に位置する；「第4世界」は中・西部の貧困地域・少数民族地域・農村・辺境地域等の低所得地域で、同数値が世界の第140位以下の水準と成る。全人口に占める4地域群の比率は、其々2%強, 22%弱, 26%と約半分である。(中国社会科学院+清華大学国情研究中心編, 胡鞍鋼主編『地域與發展：西部開發新戰略』, 中国計劃出版社, 2001年, 6 - 7頁)
- 45) 本稿で引き合いに出した2001年各省・自治区・直轄市の1人当りGDPでは、最上位の上海(37,382元)と最下位の貴州(2,895元)の格差は12.9倍にも上った。
- 46) 中国, 韓国, 朝鮮と日本の新幹線は欧州諸国も使う1,435mmの標準軌, 露西亜(サハリン州以外)と蒙古はCIS(パルト3国を除く旧ソ連邦諸国共同体)諸国・芬蘭も使う1,520mmの広軌, 日本(新幹線以外)と露西亜サハリン州は1,067mmの狭軌と成っている。軌道幅が異なる国境附近では貨物の積み替えが必要で、国境の一定区間では双方の規格の軌道4本が併設され其処で作業が行なわれる。(財団法人 環日本海経済研究所『北東アジア経済白書2003』, 新潟日報事業社, 2003年, 183頁)
- 47) 胡煥庸が1933年に発見した人口分布の地理分界線の「愛理 - 騰衝線」は、中国地図をほぼ45度の斜線で右上の黒龍江省愛理と左下の雲南省騰衝を繋ぎ、斜線以西は全国土面積の52%を占めるのに人口は5%に過ぎず、逆に面積が48%の以東の人口は95%にも上り、此の分布構造は百年來殆ど変わっていない。(朱建栄『中国2020年への道』, 日本放送出版協会, 1998年, 73 - 74頁。本稿筆者註：旧地名の「愛理」は『辞海』の解の通り、正しくは「瑛理」, '56年に「愛輝」に改称, '83年に同県は黒河市への編入に伴い解消。)
- 天兒慧・朱建栄等編著『岩波現代中国辞典』(岩波書店, 1999年)の“黒河 - 衝騰”線の項

(若林敬子執筆)では、提起当初の胡煥庸学説から外蒙古を除いた1981年の数値が示されている。斜線の以東と以西の面積は上記の調整で42.9%対57.1%と成ったが、建国後の辺境開発支援に因る漢人の西部移住にも関わらず、94.2%対5.8%の比率は当初の96%対4%(上記朱建栄の記述と異なる)と大きく変わっていない、と言う(327 - 328頁)。

中国の『辞海』の「胡煥庸」の項の璦琿 - 衝騰線に関する解説は、人口分布の懸け離れた東南 - 西北「両半壁」の区分としただけで、具体的数値の言及が無い。

- 48) 黄仁宇『中国大歴史』, 中国語版(生活・読書・新知三聯書店[北京], 1997年[原典 = 1993年英語版]) 25 - 26頁。
- 49) 世界銀行のGDP統計に拠る。矢野恒太記念会編集・発行『世界国勢図会第15版 2004 / 2005』, 2004年, 129頁。
- 50) 李光耀『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 288頁。
- 51) 成尋『参天台五台山記事』第四(1072年)。佛書刊行会編纂『大日本佛教全書』第115冊「遊方伝叢書第三」, 名作普及会, 1980年, 66 - 67頁。
- 52) 李光耀は『李光耀回憶録 1965 - 2000』の序文で、此の実績を誇り高く宣揚した(9頁)。
- 53) 李光耀『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 288 - 289頁。
- 54) 毛沢東の場合は、象徴的な事に、貨幣に触る事を極度に忌避していた(権延赤『走下神壇の毛沢東』, 78 - 81頁)。
- 55) ナイ著, 山岡洋一訳『ソフト・パワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』, 136頁。
- 56) マディソン『世界経済の成長史 1820 ~ 1992年』(1995年), 日本語版(金森久雄監訳, 政治経済研究所訳, 副題「199力国を対象とする分析と推計」, 東洋経済新報社, 2000年) 21頁。
- 57) 1945年7月, 在野の識者が延安を訪問した際に、黄炎培(註7参照)が毛沢東に歴史の「其興也焉勃, 其亡也忽焉」を説き、「歴代興亡周期率」の存在への注意を喚起し、毛は民主を以て其を打破しようと応えた。(尹高朝編著『毛沢東の老師們』, 甘肅人民出版社, 1996年, 522頁) 其の前年に郭沫若が明末の李自成蜂起の頓挫を記念して書いた隨筆「甲申三百年」も、毛は建国前に全党へ政權変質の危険を警告する材料に援引した。唐, 明, 清の其々290, 277, 276年の寿命から、中国「歴代興亡周期率」は四半千年紀(本稿筆者の造語)の250年 ~ 300年と考えられる。
- 58) ロジャース著, 林康史・林則行訳『大投資家ジム・ロジャーズ世界を行く』, 113頁。
- 59) 2005年初頭の動き。『日本経済新聞』2005年1月23日「資源新たなうねり BRICsの衝撃 困い込み, 寡占が増幅」等, 関連報道多数。
- 60) 夫人・江青宛ての書簡(1966年7月8日)。
- 61) 井波律子は『酒池肉林 中国の贅沢三昧』(講談社現代新書, 1993年)の中で、「奢侈」の字形を論拠にした宮崎市定論文「中国における奢侈の変遷」(1940年, 原題「羨不足論 支那における奢侈の変遷」)の観点から、「物量主義」の命題を導いた(12 - 14頁)。「欲望の自己増殖」は同書第4章「商人の贅沢」の小見出し(90頁)。「大快樂主義」は井波律子著『中国の大快樂主義』(作品社, 1998年)の題より。
- 62) 「孤憤」は『韓非子』第11篇の題。猶, ニクソンは1967年10月『外交季刊』に掲載された論文で、地球で中国が「憤怒の孤立」に陥る事態は許されないと述べた(陳敦徳『毛沢東・尼克松在1972』[解放軍文芸出版社, 1988年] 36頁より)が、「孤憤」は謀らずも現代の世界にも対応できるわけだ。
- 63) 李光耀『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 499頁。

- 64) 李光耀が長男に露西亜語を習わせたのは李顕龍の数学好きも一因だが、より本質的理由として彼は子供たちに対するソ連の深遠な影響を信じた。(李光耀『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 490 - 491頁) 毛沢東も全民的露西亜語学習熱を横目に全く勉強しなかったが、長男・毛岸英にソ連に留学させ、帰国後は工場責任者を経て志願軍司令部参謀兼露西亜語通訳を務めさせた。
- 65) 李光耀『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 499頁。
- 66) 成尋『参天台五台山記事』第四。『大日本佛教全書』第115冊, 67 - 68頁。
- 67) NHKスペシャル『周恩来の決断』取材班『周恩来の決断 日中国交正常化はこうして実現した』, 日本放送出版協会, 1993年, 48 - 50頁。他国の首相人事に対する露骨な関心は日本の関係者を訝らせたが、外交儀礼より戦略的情報を重視する処も中国的実用主義らしい。
- 68) 劉徳有『時光之光 我經歷的中日關係』(商務印書館, 1999年), 日本語版(王雅丹訳『時は流れて 日中關係秘史50年』, 藤原書店, 2002年)上, 203頁。
- 69) 中国の「拳」の「主力」の意(例えば「拳頭産品」=主力製品)を用いて、「双壁」や「双肩」を擬った筆者の比喻。
- 70) 竹内実は「文化問題としての日中關係」(1992年)の中で、「政治の中国」と「経済の日本」の対極図式を提示した。(竹内実編『日中国交基本文献』, 蒼蒼社, 1993年, 下324頁)
- 71) 「兩彈一星」の件は、左賽春『中国航天員飛天紀実』(人民出版社, 2003年)に拠る(2頁)。「塊頭大、人口多」の件は、1989年10月26日に泰首相・チャートチャーイ・チェンハワンと会見した時の言(『鄧小平文選』第3巻, 人民出版社, 1993年, 329頁)。
- 72) 「僑牌」は鄧小平の好きな「橋牌」(ブリッジ。本文参照)に因んだ洒落。
- 73) 由来の「張り子の虎」(NHK「街道をゆく」プロジェクト『司馬遼太郎の風景 北のまほろば/南蛮のみち』, 日本放送出版協会, 1998年, 44頁, 等多数)は、毛沢東が広島核被爆1周年の際に米国の原子爆弾が形容した言葉。
- 74) 「子適衛, 冉有僕。子曰: “庶矣哉!” 冉有曰: “既庶矣, 又何加焉?” 曰: “富之。” 曰: “既富矣, 又何加焉?” 曰: “教之。”」(『論語・子路篇第13』)
- 75) 数多い此の種の見地の一例として、2003年末の日本+亜細亞首脳会議で『東京宣言』が採択された時も、日本外務省は共同体創設を一種の標語として受け止め、実現は40 - 50年掛かると見ていた(谷口誠『東アジア共同体 経済統合のゆくえと日本』, 岩波新書, 2004年, 43 - 44頁)。
- 76) 本稿で言及した赤松要の事績は主に、朝日新聞社編『「現代日本」 朝日人物事典』(朝日新聞社, 1990頁, 31頁)に拠る。
- 77) イーザー, ユスロン「雁行モデルの終焉 批判的考察」(進藤栄一編『アジア経済危機を読み解く 雁は飛んでいるか』[日本経済新聞社, 1999年]所収)等の観点。
- 78) 曲亭馬琴の小説『椿説弓張月』(1811年)の台詞に、「世の常言に、苦中の苦を喫し得て方に人の上の人と成るべしと言へり」と有る。
- 79) 正井泰夫監修『今がわかる 時代がわかる 日本地図 2004年版』, 成美堂出版, 2004年, 8 - 9頁。
- 80) NHKスペシャル「周恩来の決断」取材班『周恩来の決断 日中国交正常化はこうして実現した』, 159 - 160頁。其の時の両者の会話は次の通り: 「なあ、君は越後から東京に出て来る時に、総理大臣に成れると思ったかい。」「冗談じゃない。越後の田舎じゃ食えんからなあ。」「俺もそうだ。讃岐の田舎では食えんから東京に出て来たんだ。」
- 81) 其の人脈を表わす「吉田学校」の名は、蒋介石が校長を務めた黄埔軍官学校や、其の1期生の林

彪が「文革」中に阿諛で唱えた「毛沢東思想大学校」を連想させる。

- 82) 都道府県の面積に占める人口過疎地域の比率は、総務省自治行政局過疎対策室が調査した2000年の数字(矢野恒太記念会編集・出版『データで見る県勢第14版 2005』, 2004年, 40頁)。都道府県のGDP総額は、内閣府「2001年度の県民経済計算について」(矢野恒太記念会編集・発行『日本国勢図会 2004/05』, 2004年, 97頁)に拠る。
- 83) 小淵の忍耐・頑張り精神の根には、明治44年(1911年)以降30年程の祖父、父親の零細企業経営者の奮闘・挫折が有った。佐野眞一『凡幸伝』第2章『「凡人宰相」のルーツ』(53-94頁)に詳述有り。
- 84) 毛沢東に関しては、両者会談(1972年)の際の言(ニクソン『ニクソン回顧録』[1978年]日本語版[松尾文夫・斎田一路訳, 小学館, 1978年]第1部330頁)。フルシチョフに関しては、ニクソン『指導者とは』日本語版, 197頁。
- 85) 華国鋒・彭真や胡耀邦失脚劇の急先鋒・薄一波の他に、天安門事件の際の手柄で北京軍区政治委員に昇進した張工(1935-)も山西の出身。因みに、天安門事件の際に強硬論を唱えたとされる王岐山(注157及び対応本文参照)も山西人(1948年生まれ)。当然ながら「山西人=保守的」の短絡は許されない(現に、山西出身の徐向前元帥は天安門事件で武力鎮圧に反対したし、解放戦争中に胡耀邦とうまく組んでいた)が、「晋商」(山西商人)が「徽商」(安徽商人)に負けた近代史と併せ考えれば興味深い。
- 86) 中国国家统计局に拠る2002年の1人当りGDP数値。NHK報道特集『データマップ 63億人の地図』第8回「中国 豊かさへの模索」(2004年10月24日放映)で、極端な例として取り上げられた。
- 87) 内閣府「2001年度の県民経済計算について」(矢野恒太記念会編集・発行『日本国勢図会 2004/05』, 97頁)に拠る。
- 88) 内閣府「2001年度の県民経済計算について」(矢野恒太記念会編集・発行『日本国勢図会 2004/05』, 98頁)に拠る。
- 89) 李御寧は『“縮み”志向の日本人』(学生社, 1982年)の中で、此の短歌を「入れ子型 込める」の典型とした(文庫版[講談社文庫, 1984年]42頁)。
- 90) 他道府県との所得格差が大きい東京都だけで、全国平均を大きく引き上げる故に、10位以下の38道府県で平均を下回る結果と成っている。(正井泰夫監修『今がわかる 時代がわかる 日本地図 2004年版』, 27頁)
- 91) 現政治局常務委員会に於ける山東と河北の出身者は表2で示したが、山東の場合は前回居らず、河北の場合は建国後始めてなのだ。
- 92) 直近の2003年には、群馬県の蒟蒻芋の生産高は全国の87%も占めた。(矢野恒太記念会編集・出版『データで見る県勢第14版 2005』, 40頁)
- 93) 司馬遼太郎『街道をゆく 二十 中国・蜀と雲南のみち』(1982年)。『街道をゆく 二十』, 朝日新聞社, 1983年, 43頁。
- 94) 本稿筆者は「戦略的思考-志向を巡る現代日・中の“文化溝”(觀念・視野篇)」(『立命館国際地域研究』第14号[1999年])で、此の類いの「龍穴・龍脈」現象を中国の「地理-国勢線」に絡めて論じた。
- 95) 「両雄不俱立」の出典は『史記・酈生列伝』。「天無二日, 民無二主」の出典は『孟子・万章章句上』。

- 96) 小淵は自民党副総裁在任中の1995年、群馬県党連会長選挙で不意にも福田康夫が推す人に負けた。衝撃の余り彼は支援者の会合で、「受けた恩は石に刻んで、恨みは水に流す」と言う政治家の信条を捨てて、今回は許さずここ5年間は徹底的に恨みを晴らしてやって行く、と誓った。(佐野真一『凡宰伝』, 213頁) 福田赳夫が息子・康夫に地盤を譲った事で1区3強の局面は変わらず、小淵恵三・福田康夫に道を譲るべく橋本総裁の裁定(1996年)で中曽根康弘が比例区に転出し、後に福田赳夫系統の小泉総裁が中曽根に引退を迫った(本文参照)とは、実に因果な巡り合わせである。
- 97) 米人ジャーナリスト・スノーとの談話(1970年12月18日)。
- 98) 楊炳章(ベンジャミン・ヤン)『鄧小平 政治的伝記』(1998年)に拠れば、香港の老獪なジャーナリスト・陸鏗が胡耀邦に王震との同郷関係の話を仕掛けると、育った処は同じだが歩んでいる道は違うよと胡が答え、其の不用意な発言は王震を怒らせた。(日本語版[加藤千洋・優子訳、朝日新聞社、1999年]268頁)。猶、胡の失脚劇で最も強い攻撃を加えたのは薄一波(註85参照)とされ、胡の追悼会で遺族が彼の参加だけ断固拒否したと言う(韓文甫『鄧小平伝 治国篇』, 台北時報出版、1993年、759頁)。
- 99) 「赤条条、来去無牽掛」は『紅樓夢』第22回の『寄生草』の歌詞で、毛の共鳴は長年の英文秘書・林克の指摘(林克『我所知道的毛沢東 林克談話録』, 中央文献出版社、2000年、54頁)。
- 100) 金賢妃著、池田菊敏訳『いま、女として 金賢妃全告白』文庫版(文春文庫、1994年)後書き、下371頁。
- 101) 毛沢東が好きな唐の詩人・王勃の『滕王閣賦』の句。
- 102) 第16回党大会で選出された中央委員会の常務委員の出身地(原籍)は、胡錦濤・呉邦国=安徽、温家宝=天津、賈慶林=河北、曾慶紅=江西、黄菊=浙江、呉官正=江西、李長春=吉林、羅干=山東。
- 103) 厳密に言えば、1989年春の胡耀邦逝去と胡啓立失脚から'92年の胡錦濤昇進までの期間は例外だが、其でも一種の奇観と観て能い。
- 104) 夏剛「“儒商・徳治”の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化(3)」(『立命館国際研究』15巻2号[2002年]連載)参照。
- 105) 本文でも言及したテレビ連続ドキュメント『河殤』(蘇曉康・王魯湘総執筆、1988年6回放映)の主張。
- 106) 建国10周年祝典に参加する為に北京を訪れたフルシチョフが、「好戦的雄鷄」の比喻で暗に中国を非難した。
- 107) 稲垣清『中国のニューリーダー Who's who』(弘文堂、2003年)の統計(11頁)に拠る。
- 108) 本稿筆者の用語。
- 109) 経済特区化の上海開発の文化建設の象徴として、亜細亜最高・世界第3の468mを誇り、「東方明珠」の名を冠したテレビタワーが1992年に着工し、'94年に竣工した。ロジャースも1999年の世界周遊で似た発想を以て、上海は「21世紀資本主義のエメラルド都市」に成ろうと預言した。(ロジャース“*Adventure Capitalist*”[2003年]、日本語版[林史康・望月衛訳『冒険投資家ジム・ロジャース世界大発見』、日本経済新聞社、同年]77頁)
- 110) 上村幸治『中国 権力核心』、毎日新聞社、2000年、317頁。
- 111) 錢塘江の壯観、西湖の秀麗と杭州の繁華を詠んだ柳永の詞「望海潮」が、金の南侵を誘発した一因とされた。(羅大経『鶴林玉露』:「此詞流播、金主亮聞歌、欣然有慕於“三秋桂子、十里荷

- 花”，遂起投鞭渡江之志。」胡雲翼選註『宋詞選』，上海古籍出版社，1962年，41頁）隋煬帝の大運河建造と揚州の魅力の因果に就いて，夏剛「“ 儒商・徳治 ” の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（3）」註149参照。
- 112) 夏剛「“ 儒商・徳治 ” の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（3）」本文，及び対応の註150参照。
- 113) 中曽根康弘『自省録 歴史法廷の被告として』，93頁。
- 114) 小淵という男を解くキーワード」として，佐野真一は此の3語を挙げた。（『凡幸伝』，211頁）
- 115) 半藤一利・保阪正康・宮沢喜一「昭和天皇ご聖断へ “ 謎の静養 ”」，『文芸春秋』2005年2月号，291頁。
- 116) 小淵死後の「陰の総理」と言われた元自民党幹事長・野中広務は，小泉政権誕生早々の2001年5月に内閣を「ファッショ」，小泉を「独裁者」と批判した。（松田賢弥『無情の宰相 小泉純一郎』，講談社，2004年，202頁）小泉流の「ワイドショー政治」に関する言説は多数有り，中曽根康弘は「ショーウィンドー内閣」の酷評までした（『自省録 歴史法廷の被告として』，11頁）。
- 117) 『日本経済新聞』2005年1月27日夕刊。身長159.7[㍉]の異樹理は減点3（162[㍉]未満の場合1[㍉]に付き1点減）のハンディを克服して，2大会連続銀メダルに輝いた，と言う。
- 118) 田中角栄の学歴劣等感と官僚操縦に就いては，早坂茂三『早坂茂三の「田中角栄」回想録』（小学館，1987年）等に逸話が多い。昭和天皇の角栄嫌いも逸話が多数有り，ブラウン管で彼を見ると即座にチャンネルを変えた程とも言われたが，両者の心理的・社会的相異の本質に関する構造的解説として，高野孟の「“ ヒロヒト的なもの ” 対 “ カクエイ的なもの ”」の図式（『田中角栄の読み方』，ごま書房，1983年，38 - 39頁）を挙げたい（夏剛「“ 王・民之大欲・大恐 ”：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論）」[『立命館国際研究』13巻2号2000年]引用参照）。
- 119) 上村幸治「胡锦涛が差し向けた2人の‘密使’ 金正日追放 中国がついに下す」に拠れば，金正日は2000年5月30日に人民大会堂で江沢民から銭其琛を紹介された際，中韓国交樹立の立役者への憎みから握手を拒否したが，戴秉国には信頼を寄せて好く会っている。（『現代』2003年10月号，39頁）其を裏付ける様に，戴は金正日との30回以上の会見の感触に基いて，2005年1月に西側に対して気な説得を要請した。
- 120) 産経新聞・斎藤勉『スターリン秘録』（産経新聞ニュースサービス，2001年）に詳述有り（155 - 159頁）。
- 121) 夏剛「中国，中華民族，中国人の国家観念・民族意識・“ 国民自覚 ”」（中谷猛・川上勉・高橋秀寿編『ナショナル・アイデンティティ論の現在 現代世界を読み解くために』[晃洋書房，2003年]所収）参照。
- 122) 鄧小平が1978年に58年ぶり新嘉坡を訪れた時の言。李光耀『李光耀回憶録 1965 - 2000』，671頁。
- 123) 1984年10月22日，党中央顧問委員会第3回総会での講話。『鄧小平文選』第3巻，90頁。
- 124) 中国語の「血濃於水」も日本語の「血は水より濃い」も，英語の諺“ Blood is thicker than water ” から来た熟語と思われる。
- 125) 『論語・学而篇第1』。
- 126) 中国社会科学院 + 清華大学国情研究中心編，胡鞍鋼主編『地域與發展：西部開發新戰略』，199 - 203頁。

- 127) 国際シンポジウム「東アジア共同体の構築を目指して」(2005年1月)に参加した際、ソウル大学校政治学科教授・張達重から受けた教示。
- 128) 毛・鄧はダレス以来の米国の「和平演変」(平和的変容・変質・顛覆)工作を警戒したが、冷戦思考からの脱却に伴って江沢民時代から党の宣伝からほぼ消えた。許家屯(元中共中央委員、江蘇省党委員会第1書記、新華社香港支社社長)は、米国内命(1990年)後の「論社会主義的和平演進」(香港『信報』1992年6月1日)で、肯定的「和平演進」(平和的変容・前進)を主張した。
- 129) 科学哲学者・金觀涛と夫人・劉青峰は『興盛與危機』(1983年。日本語版=若林正文・村田雄二郎訳『中国社会の超安定システム 「大統一」のメカニズム』,研文出版,1987年)で、専制体制の強靱さに中国歴史の「超安定構造」を見出した。
- 130) 内山完造「表門と裏門」,『中国人の生活風景 内山完造漫語』(東方書店,1979年)所収め(10-13頁)。
- 131) 『仁者人也』の出所は『孟子・尽心章句下』,「政者正也」の出所は『論語・顔淵篇第12』。
- 132) 夏剛「“儒商・徳治”の道:理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化(1,2)」(『立命館国際研究』14巻4号,15巻1号[2002年]連載)参照。
- 133) 岡田充『中国と台湾 対立と共存の兩岸関係』,5頁。
- 134) 田原総一郎『「円」を操った男たち 政財官マナー人脈の暗闘』,講談社文庫,1991年(単行本=『円を撃て』,講談社,1987年),216頁。
- 135) 毛沢東はニクソンに対して、自分は右派の共和党の方が好きで、前回の大統領選で貴方に一票を入れましたよと言った。2人の悪玉の内、比較的悪くない方を選んだわけですね、とニクソンは応えた。(『ニクソン回顧録』日本語版,第1部329頁)
- 136) 毛沢東は1970年12月18日,米人ジャーナリスト・スノーに対して、英語を交えて「文革」の「全面内戦 all-round civil war」に言及し,「1967年7月Julyと8月Augustの2ヶ月は駄目で、天下大乱に成った」と語った。
- 137) 薛慶超『歴史転換期的鄧小平』(中原農民出版社,1996年),産経新聞「毛沢東秘録」取材班『毛沢東秘録』(産経新聞ニュースサービス,1999年),下冊42頁掲げ。
- 138) 夏剛「共産党中国の4世代指導者の“順時針演変”(時計廻りの移行) 理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化新論」(『立命館国際研究』16巻1号[2003年])参照。
- 139) 関川夏央『司馬遼太郎の「かたち」「この国のかたち」の十年』(文芸春秋,2000年),文庫版(文春文庫,2003年)122頁。
- 140) 台湾総統府国家安全会議副秘書長・江春男の言。岡田充『中国と台湾 対立と共存の兩岸関係』,112頁。
- 141) 童懷平・李閔成編『鄧小平八次南巡紀実』(解放軍文芸出版社,2002年)287頁等,文献多数。
- 142) 夏剛「日本の中空・“頂空”(頂点の空虚)と中国の“中控・頂控”(中心・頂点に由る支配)『日本礼法入門』を手掛りとする両国の言説・観念の一比較」(『立命館言語文化研究』,第13巻2,3,4号[2001-02年]連載)参照。
- 143) 『龍虎鬪』は広東料理の蛇肉と猫肉の炒め物の美称で、此处では東亜の「龍」と「虎」の衝突に譬える。
- 144) 李光耀『李光耀回憶録 1965-2000』,698頁。
- 145) 『匪夷所思』は『易経・渙卦』が出典の成語。本稿筆者は此处で原義を用いる一方、蒋介石・毛

- 沢東時代の国・共両党が罵り合った侮辱語の「匪」や、「大漢族主義・大中華思想」に由る少数民族・周辺国への蔑称の「夷」に引っ掛けた。
- 146) 李光耀 『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 699 頁。
- 147) 李光耀 『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 699 - 700 頁。
- 148) 李光耀 『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 700 頁。
- 149) 李光耀 『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 496 頁。
- 150) 李光耀 『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 498 頁。
- 151) 1988 年末から翌年春、一部の識者が韓国・台湾や南米等の開発独裁体制の成功念頭に置いて、改革・開放の推進には中央集権的国家権力が要ると主張した。民主化運動の識者は其に反撥したが、趙紫陽も「新權威主義」や「強人政治」に傾いていた(章海陵「趙紫陽の鏡子照出痛苦與希望」[香港『亞洲週刊』2005 年 1 月 30 日号, 25 頁]等参照)。鄧小平の共鳴の一例は、「中央要有權威」(中央は權威を有しねば成らぬ)と題する談話(1988 年 9 月 12 日。『鄧小平文選』第 3 卷, 277 - 278 頁)。
- 152) 中曽根康弘 『自省録 歴史法廷の被告として』69 - 70 頁, 等。
- 153) 中曽根康弘 『自省録 歴史法廷の被告として』, 161 頁。
- 154) 司馬遼太郎 『街道をゆく六 沖繩・先島への道』(1974 年)。司馬遼太郎 『街道をゆく 六』, 朝日新聞社, 1975 年, 48 - 50 頁。
- 猶, 司馬遼太郎が天安門事件後に中国を疎遠し台湾に近寄った経緯は, NHK「街道をゆく」プロジェクト『司馬遼太郎の風景 中国～江南のみち/蜀と雲南のみち/閩のみち』(日本放送出版協会, 2000 年)に詳述有り(13 - 15 頁)。
- 155) 李光耀 『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 703 頁。
- 156) 『読売新聞』2005 年 1 月 30 日。
- 157) 阮銘「大陸演变的三種可能」, 香港『百姓』半月刊 273 期, 1992 年 10 月 1 日。韓文甫『鄧小平伝 治国篇』, 810 頁拠り。
- 158) 李光耀 『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 347 頁。
- 159) ニクソン 『指導者とは』, 日本語版 9 頁。
- 160) ニクソンが『指導者とは』で其々 1 章を使って詳論した政治家は, チャーチル・ドゴール・アデナウアー・フルシチョフ・周恩来であり, 「ドゴール」と「アデナウアー」の間に「マッカーサーと吉田茂」の章も有る。
- 161) ニクソン 『指導者とは』日本語版, 345 頁。
- 162) ニクソン 『指導者とは』日本語版, 349 頁。
- 163) 李光耀は 1967 年訪米の実感として, 米国人は国家の人口・幅員で問題を考えがちで, 東南亜に関してはマレーシア人や新嘉坡人はインドネシア人に比べて, 彼等にとって取るに足らぬ存在だと述べた。(『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 511 頁)
- 164) ニクソン 『指導者とは』, 日本語版 346 頁。
- 165) 孔子謂季氏: “八佾舞於庭, 是可忍也, 孰不可忍也?”(『論語・八佾篇第 3 』)
- 166) 李光耀 『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 242 頁。
- 167) ニクソン 『指導者とは』日本語版, 348 頁。
- 168) 毛沢東は 1974 年 7 月 17 日の党中央政治局会議で, 容赦無く人を攻撃するとの意味で江青に「鋼鉄公司」の渾名を付けた。江青は此を鄧小平に贈ろうと反撥した(杉子編『毛沢東的感情世界』,

吉林人民出版社, 1990年, 84頁)が, 鄧の強硬な辣腕は似合わないでもない。

- 169) 佐々淳行『危機管理のノウハウ・PART 2 80年代・闘うリーダーの条件』, PHP文庫, 1984年, 176 - 195頁。
- 170) 李光耀『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 31 - 32頁。
- 171) 大陸で全面内戦・思想弾圧が展開された1968年, 台湾の作家・柏楊は「国家元首侮辱罪」に因り懲役10年の刑を言い渡されたが, 蒋介石死去の前日(1975年4月4日), 中共黨員・張志新が反「文革」言論に因って, 毛沢東の甥・毛遠新(遼寧省党委員会書記・瀋陽軍区政治委員)の裁決で死刑に処された。
- 172) 天安門事件で海外から最も非難を浴びたのは戦車が人を轢き潰した云々だが, 銃剣で人を刺し殺した光州弾圧も冷酷極まり無い惨劇である。
- 173) 1965年政変後に所謂共産党支持者が約50万人も殺害され, 1983年アキノ議員がマニラ空港で衆人環視の中で銃殺された事は, 李光耀にも衝撃と不安・不快を与えた。(『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 291, 331 - 332頁)
- 174) 1986年1月17日の中央政治局常務委員会で, 鄧小平の談話に対する同調。(『鄧小平文選』第3巻, 153頁)
- 175) 党中央学校研究集団の最近の提言として, 一部の「先送り」の批判と共に海外で報じられた。
- 176) 楊炳章著, 加藤千洋・優子訳『鄧小平 政治的伝記』, 304頁。
- 177) 李光耀『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 669頁。
- 178) 本稿筆者の命名。
- 179) 李光耀『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 711 - 712頁。
- 180) 李光耀『李光耀回憶録 1965 - 2000』, 158頁。
- 181) 須田慎一郎『巨大銀行沈没 みずほ失敗の真相』, 219頁。
- 182) 江南著『蔣経国伝』(1984年), 日本語版(川上奈穂訳, 同成社, 1989年)12頁。
- 183) 「猛牛」は小淵恵三の自称・「鈍牛」を擬った本稿筆者の比喩。因みに, 小淵は牛の置き物の蒐集が趣味であった。
- 184) 宋・釈道原『景德伝灯録』: 「我見兩個泥牛鬪入海, 直至今無消息。」
- 185) 楊振寧も講演「帰根反思」(北京・世界知識出版社『世界知識』隔週刊, 2004年第21号[11月1日], 59 - 61頁)の中で, 此の特質に言及した。
- 186) 子貢問政。子曰: “足食, 足兵, 民信之矣。” 子貢曰: “必不得已而去, 於斯三者何先?” 曰: “去兵。” 子貢曰: “必不得已而去, 於斯二者何先?” 曰: “去食。而古皆有死, 民無信不立。”(『論語・顔淵篇第12』)
- 187) ニクソン『指導者とは』日本語版, 365頁。
- 188) 1992年7月1日, 大統領の特使として国家安全保障補佐官が北京を訪問し, 米国で大統領・国務長官しか知らない極秘交渉を行なった。錢其琛『外交十記』に詳述有り(170 - 177頁)。

由中日政治文化、国际战略探讨东亚共同体的可行性及方向(上)

在东亚首脑会议创设使东亚共同体组建得以始动之际，本文作者基于中、日将在该地域联合中发挥决定性影响的估计，通过分析两国政治文化、国际战略，探讨东亚共同体的可行性及方向。

连载前半部首先提示东亚共同体结成对世界政治、经济格局的重大影响，同时指出“羨憎相织情结”为构筑的障碍兼动力。作者将马斯洛“欲望阶层模式”套用于赤松要“亚洲工业国雁行成长形态”，推论各国（地区）发展阶段和价值取向的差异使本大区共同体必循渐进之路。作者依据经济、政治实力划分出东亚内“三个世界”，并预计量子飞跃式的“穷→变→通”和梯形递进般的“庶→富→教”将成为东亚“先富→共荣”的共同途径。

作者视物质基础、精神风土的类型、相通为共同体的内在纽带，以独创的“地缘政治、经济、人文等高线”概念，剖析当代中、日权力结构的异同及东亚各方的对立统一。在阐述中国汇入海洋文明、发挥国际影响的大趋势时强调，作者概括的中国政治文化之要谛——“理、礼、力、利”结合，在全球化时代仍作为中国治世、外交的经典性原理起积极作用，并可望对东亚、世界的新秩序赋予启示。作者由改革、开放期中国的“鸟笼经济”派生出“鸟笼政治”观念，从“升龙”日本、“四小龙”、“四小虎”及“巨龙”中国的强力管理抑或开发独裁的经验、教训中，寻求 21 世纪东亚提携共进的凝聚力、推动力。

(XIA, Gang 本学部教授)